

HEADACHE - HEADACHE

《前編》

諧謔鳥

頭痛が痛い。
小さな金のロケットが、赤色の雨と灰色の血とに濡れていた。

死体のようにだらしなく開いた蓋の間から、透き通った翡翠色の瞳がこちらを見つめている。いかにも「無垢」という言葉が似合いそうな、柔らかい金髪と柔らかい笑顔。世界から存分に「与えられた」人間。
百二十と九番目はこいつにしよう。

右手に百二十と八つ目の心臓を。

左手に断ち切られた金の鎖を。

頭痛が痛い日の空は、今日もハイイロに腐敗していた。

頭痛が痛い。

そう呟いたのは、物心ついてから：生まれて初めて口にしたコトバが「パパ」でも「ママ」でもなく「ずちゅうがいたい」であり両親を果てしない絶望の淵にたたき落としたその瞬間から数えて四百九十九万六千五百十と三回目だった。我が子に「エイク^{痛み}」なんて馬鹿げた名前をつけたことを両親は死ぬほど呪ったことだろう。人の痛みが分かる子に育って欲しいとかなんとか。

もしその名の通り育っていたとしたら、今オレの目の前に鉄格子、頭の上に似非倫敦塔、足の下にデブ、尻の下には入れ墨マツチョが敷かれているこんな状況は有り得ない。揃いも揃って素敵な方向に折れ曲がった囚人どもの鼻の骨も。しかしだ。たとえばオレが名前に込められた願いの通り育ったとして、デブを踏まず、マツチョに座らず、クソ野郎どもの鼻を折らない人生をオレは無事におくれただろうか？……無理だな。明らかに無理だ。独断と偏見法第四条【ムカつく奴は、これを折ることを認める】。

頭痛が痛い。

これで四百九十九万六千五百十と四回目の呟きを漏らす。

コトバが間違っていることは百も承知だ。四百九十九万六千五百十と四も承知している。しかし幼い頃から繰り返してきた習慣というやつは、たとえそれが明白な過ちであると分かっているにもかかわらず、とりわけその過ちによって、本人が特別の不利益を被ることがないような場合は。

「だからこうやって、俺たちが矯正してやっってるんだろ」指先で鍵束をじやらじやら回しながら看守が言う。「間違ってるくせに、ひどい目に遭わないからっていい気になってるお前らみたいな悪党を、さ」

太い鎖が巻かれた足下に、東向きの小さな窓から四角い光が落ちている。風切羽を切られた哀れなカラスども

がけたたましく鳴いているのが聴こえる。

朝……。結局また眠れなかった。目の下の隈は大変な状態になつてゐるだろうな。だけどここには生憎鏡が無い。囚人にこそ鏡は必要なんじゃないのか？自らの醜く、みすばらしい姿を映す鏡が。

「朝飯の時間だ。ありがたく喰えよ」

看守は台車から取り出した歪んだ鉛色のトレーを鉄格子の下に僅かに開いた隙間から差し入れた。すつかり冷めたスープは、看守の手を経ることでほかほかに温まる。それがこの看守の能力。物体をほかほかにする程度のささやかな熱放射。ドブ水のように濁ったスープから立ちのぼる湯気は、それでも一応食物の匂いだ。オレの足の下のデブの鼻先を湯気はちろちろ燻っているが、それでもデブはびくりともしない。

「またやったのか」看守があきれ顔でオレを見る。「いくら何でも度が過ぎるぞ」

「うるさいな。いつも言ってるだろ。囚人折られるのが嫌ならバファリンよこせよ、バファリン」

「なあ、いつも思うんだがその『バファリン』ってなんだ？食いもんか？意味分かんねえ」

「知らないならいいよ、別に。わざわざオレと一緒にされたつてことは、こいつらそれなりに名の知れた悪党なんだろ？それが可哀想に……。見ろよ。もう抵抗もしなくなつた。つまんないから他のやつと換えてくれないか？」

「：お前がここに入つてから再犯率が馬鹿みたいに低いらしくてな。誰も戻つてこない。おかげでこちらら商売上がたっぷりだぜ」

「そうか。そりや良かった」

喉の奥から乾いた笑いが漏れる。笑うのは：久しぶりだ。

笑顔……。オレはあいつの顔を思い浮かべる。オレを見上げる翡翠色の瞳と、決して消えることの無い微笑みを。自然と頬が緩んだ。

「なんだ、お前。人の顔ジロジロ見やがつて。オレが笑うのがそんなに珍しいかよ」

看守は狼狽した様子で目を反らす。「う、うるさい！黙つて喰えよ」

頭痛が痛い。これで四百九十九万六千五百十と五回目。そもそもどうして数え始めたんだっけな。：そうだ。ちつちやいオレは、ろくに固まってもいない腐ったヨーグルトみたいな頭ん中で考えた。腐つてないヨーグルトはただの牛乳だが。オヤジもオフクロも近所のガキどもも、誰もこんな頭痛に悩まされちやいない。皆ふわふわのスポンジケーキみたいな軽くて穴だらけで甘くて柔らかい脳みそをその頭蓋骨にしまい込んでるつてのに、オレだけが超合金変形合体ウニみたいな自分の脳みそにイジメられてるんだ。そんなの不公平だ。オレだけが世界に嫌われてる。世界はオレ個人に悪意を向けている。だから死んだ時にカミサマだかエンマサマだかに言つてやるん

だよ。オレは世界からこれだけの酷いことをされた。だからオレにはそれだけ世界に対して酷いことをする権利があるんだよ、つてな。地獄に堕ちたつて構わない。それで頭痛が消えるのなら。独断と偏見法第一条【オレ個人、世界への基本的復讐権はこれを認める】。

これまで的人生で積み重ねて来た復讐は累計四百九十六万とんで六十と二。このところ返済のペースがちよつとばかし滞っている。本当はこんなところでぐずぐずしている場合じゃないんだが。あれ？そもそもオレなんで掴まったんだっけ？この悪名高いヘッドエイク様がケーサツなんぞに遅れを取るはずが無いのに。あれー、なんでだっけ。おもいだせないな！。

頭痛が痛い。四百九十九万六千五百十と六回目。オレはこの世界が嫌いだ。昔は憎んでさえた。カミサマとやらが手抜きして創つたこの世界を。

神は七日間で世界を創造した。

神は一日目に世界を創る宿題を与えられ、メモを怠つた。

べ切は七日後だった。

二日目に神は世界を創ることを忘れ、

三日目を何もせずに過ごした。

四日目に神は世界を創ることを思い出し、

五日目を逃避してだらだらと過ごした。

六日目に神は締切に怯え、慌てるだけの一日を終え、

七日目におおざりな世界を創造してとりあえず提出し

た。

それがこの世界だ。

おかげさまでこの世は綻びだらけ。誰かが赤ペンで修正してくれりや良かったんだが、一体誰が神の過ちを正すつてんだ？神の宿題はいつだつて百点満点だ。たとえそれが夏休み最終日に慌てて仕上げた世界だとしても。

神はあまりに慌てていたので、自分が創つた世界に自分の道具を幾つも置き忘れた。世界を創るために使う神の道具だ。目に見えないそれはいつの間にか母親の腹に入り込み、赤ん坊に宿る。この世界の住人は皆、神の能力をちよつとだけ持つて生まれてくるのだ。

空を飛ぶ奴がいる。火を吹く奴がいる。触れずに物を動かせる奴もいる。能力の数は多種多様。十人十色、つてやつだ。皆違う力を持つて生まれて来る。しかし、だ。鍛冶屋の息子が火を吹き、大工の息子が怪力なら話は早かった。誰もがハッピーだ。だがオレたちはこの世界が綻びだらけであることを忘れちゃならない。生憎鍛冶屋の息子は空を飛び金床捨てて彼方へ消える。シンソーのオジョウサマは透き通つた肌の細腕で父親が苦心して建てたお屋敷を片手で叩き潰す。まともに社会を回すには、せつかくの天賦の才を押し込めて、でくの坊みたく暮らすしか無い。コーキョーのフクシのため、なんて割り切る人間が多数派なお陰で今の所社会はソツなく運行しているが、自分の能力さいのうを持って余し、どっかで使いたくなる

輩も：それもとりわけ迷惑なくつかのやり方で使いたくなる輩もいる。そーゆー奴らがこうしてオレの足に踏まれ、尻に敷かれ、鼻を折られて牢獄の床に転がるわけだ。

ああ、頭痛が痛い。四百九十九万六千五百十と七。

がつつ。鉛のスプーンと皿がぶつかって硬質な音を立てる。見ると機械的に口に運んでいた中身が無くなっている。朝ご飯終了だ。膝の上から大皿を落とすと、厚くて安い皿はぼきつ、と皿らしからぬ音を立てて割れる。散らばった皿は十人分。：痛みを我慢するつてのは思いのほかエネルギーを消費するんだ。この飯を喰うはずだった奴らならどうせまだ目を覚まさないし。このぐらいは構わないだろう。独断と偏見法第十九条【寝てる奴のメシは、これを喰うことを認める】。

「いいわけねーだろ。食い過ぎだ。晩飯やらねーぞ」

看守がじとつとした目でオレをねめつけていた。

「なんだ、まだ居たのか。オレが十人分飯喰ってるのずつと眺めてたのかよ。看守つてヒマなんだな」

ここを出たら看守にでもなるうか。：そーいやオレの刑期つてどれくらいなんだっけな？聞いた気もするんだが忘れちゃった。

「戻つて来たんだよ。なんでお前の食事を見てなきやならないんだ。おれはアレか、お前大好きか」

「違うのか？」

「：は、はあ？意味分かんねえコト言うなよ！」

また狼狽えてる。こいつをからかうのは娯楽の少ない監獄じやない暇潰しだ。こいつはひと月前からここに来るようになった新人だ。その前は耳の遠い爺さんだったから、からかい甲斐つてもんがなかった。オレが他人に思えないとかなんとか言つて、いつもこの房の前に椅子を置いて座つていた。どうやら軽くボケてたらしく、オレ相手に毎日のように娘の話をする。いつも同じ話だ。随分可愛らしい娘さんだったが、爺さんがこの様子じゃ娘とやらももう婆さんと言つてもいいくらいの年齢になつてゐるだろう。：あの爺さんはどこ行つちまつたんだろうな。一度看守の奴にそれとなく尋ねてみたが、前任者については知らない、と素っ気なく答えるだけだった。白髭を蓄えて、背中の曲がったあの爺さん。口笛を吹くと唇の間からぶかぶかシャボン玉が出る爺さん。なんて地味で、シヨボくて、素敵な能力だろう。どうせならオレもあーゆーのが欲しかったぜ。そしたらあれほど世界を憎たらしく思うことも無かつたのかもしれない：ああ、クソ。既に確定した過去に可能性を考えるなんてバカらしい。

牢獄のすぐ傍を流れる偽テムズ河の水音が、ウニに突き破られて穴だらけの頭蓋にしみ込んで雨になる。半地下の牢獄はいつだつて雨の気配を引きずつて湿つてゐる。雨。雨だ。雨が降つていた。あの日も頭痛が痛かつた。雨に濡れた血に濡れたロケットから覗いていた顔。オレに向かつて微笑むあいつの顔。記憶の中の二つの顔が、

どうしても同じには思えない。でもそれはきつとくだらない自己弁護だ。独断と偏見法第百とんで六条【自己弁護は、これを禁じる】。

頭痛が痛い。四百九十九万六千五百十と八。

「おい、聞いてんのかよ」看守がイライラした口調で言う。

「悪いな、全く聞いてなかった。ちよつとウニとの会話をエンジョイしてたもんでね」

「はあ？ウニ？意味分かんねえ」

意味分かんねえ、が看守の口癖だ。着任から教えてこいつがオレの前で口にした「意味分かんねえ」の数は五千四百十と八。看守だつてオレとばかり会話してるわけじゃないだろう。だとしたらこいつの「意味分かんねえ」率はなかなかのものだ。よほど頭が悪いか、理解力が乏しいか、もしくは馬鹿なんだろう。

「いいか、もう一回言うぞ：つてか、どつから聞いてなかった？」

「そうだな、『理由はよく分からんが警視がお前に会いたがつててもしかしたら再犯防止に貢献したことについて恩赦が出るのかもしれない』としたら良かったなでももしそうだとおめどうなんて絶対言つてやんねーからな』つてことを長々と実に廻りくどく、分かりにくく、その上表現力に乏しく語つてたことしか分からない」

「全部聞いてんじやねえか」

「まあな」

看守はうんざりした様子でばりばりと頭を搔く。ハゲぞ。

「…まあ、つまりそーゆーこつた。今からお連れするからそこで待つてろよ」

「牢だぞ。出れるか馬鹿」

「馬鹿つて言うなよ。馬鹿つて言つた奴が馬鹿なんだぞ」

「知つてるか？そのセリフは馬鹿しか使わないんだ。ま、当然知らないだろうな。お前馬鹿だから」

「意味分かんねー」看守は苦々しく吐き捨てて、牢の四角いしましまの視界から退場した。しばらくすると石の階段を踏む音が聞こえて来たから、どうやら本当に警視とやらを呼びに行つたのだろう。

頭痛が痛い。四百九十九万六千五百十と九。

この綻びた街の名は「似非倫敦えせロンドン」という。「似非」と言

うからには模倣された被害者が存在するはずだが、「似非」でない倫敦など実際のところ小説の中にしか存在しない。虚構の中にホンモノの倫敦を作り上げた作家たちはしかし、現実の似非倫敦しか見たことがないだろう。真実は嘘の中にのみ存在し、真実とは嘘を指し示す。脆弱で欺瞞に満ちたループに支えられた、綻びだらけの街。その似非倫敦の街を犯罪者どもの手から守る警察組織が「似非倫敦市警」だ。

警視には一度だけ会つたことがある。ポマードで撫で付けた黒髪に立派な口髭。無駄に肩幅の広い、見るから

に偉そうなおつさんだった。聞く所によれば能力と仕事とが噛み合った希有な人物で、なんでも千里眼だとか。なんとも警察にうってつけじゃないか。さぞ出世も速やかだったに違いない。エリートだ。

そのエリート髭むしる偉髭が相変わらず広い肩で風を切りながらこちらへやつてくる。看守の奴と：知らないお嬢ちゃんも一緒だ。ふんわり広がった長いスカートがなんとも牢獄に似つかわしくない。長い睫毛の蒼い目はきよろきよろと辺りを見回しているが、意思が強そうな赤い唇はきゅつと一文字に結ばれている。そうでもしなきや、きつと口から内蔵が飛び出しちまうんだろう。お嬢ちゃんのウエストはコルセットで限界まで締め付けられていた。あれは頭痛の痛みに次いで世界で二番目に苦しい経験だとオレは思う。独断と偏見法第九十二条【コルセットの着用はこれを禁ずる】。

えへん。偉髭警視が偉そうに咳払いをした：こいつ、随分と老けたな。骨格の良さはオレの記憶にある警視そのままだが、服が随分だぶついている。顔には深い皺が幾つもの刻まれ、真っ黒だった髪は半分ほどが白髪になっていた。一年半ぶりの筈だが、十年は年を取ったように見える。

えへん。警視はオレが見ているのを確認した上でもう一度咳払いした。

「〈ヘッドエイク〉だな」

「そうとも、オレはヘッドエイク頭痛だ。分かつてんならバファリンよこせよ偉髭え」

そう答えると、後ろで不安げに佇んでいたお嬢ちゃんが驚きに目を丸くする。そして所長の袖を控えめな仕草でちよいちよいと引くと、耳元に口をよせて囁く。だがその内容はオレにも筒抜けだ。このお嬢ちゃん、どうやら牢獄慣れしてないようだな。石造りの牢屋の中で、囁き声がどれほど反響するか知らない。

「お父様、この人が頭痛さんですの？思っていたのと随分違いますわ」

「ああ、そうだよ。エリー。パパはこの人と話があるんだ。ちよつと静かにしててくれないか」

娘かよ。母親に似て良かったな。

「お父様、『ばふありん』ってなんですか？私存じませんわ」

「パパにも分からないよ、エリー。パパはこの人と話があるんだ。ちよつと、ちよつとだけ静かにしててくれないか」

「お父様、『えらひげ』ってお父様のことかしら。だとしたら素敵な呼び方ですわね。私、これからお父様を『えらひげ』とお呼びしてもよろしくて？」

「ああ、エリー、パパはこの人と大事な話があるんだ。お願いだから静かにしてくれないかな？」

「えらひげさん、頭痛さんが：その：：こつというお方なら、

このような場所に入れておくのはあまりに可哀想というものではないませんか？」

「そんなことは無いよ、エリー。この人は酷く悪いことをした、酷く残酷な人間なんだ。本当は殺されてしかるべきところを、自首や犯罪抑止力、他にちよつとした事情を鑑みて、寛大なる女王陛下が特別に終身刑になさったんだ。それとエリー、私を『えらひげさん』などと呼ぶのはおよしなさい」

ちよつとした事情、特別に、ね。やむを得ない事情、しかたなく、の間違いじゃないのか。オレは偉髭の言葉を鼻で笑い飛ばす。

「終身刑！えらひげさん、この頭痛さん、どんなことをしたのです？たしかに目つきは悪いかもしれませんが、とてもそのような悪人には見えませんわ」

「エリザベス！パパはこの人と話があるんだ！静かにしてなさい！それと私を『えらひげ』と呼ぶな！」

偉髭の怒鳴り声が監獄中に響き渡る。看守が腹を抱えて笑っていた。

「：お父様、キレてますの？」

「ああ、エリー、すまない。取り乱して悪かったね。しかし切れてるのはパパじゃなくてお前さんだよ。好奇心は悪いことじゃないが、ちよつとは自分のことも心配なさい」

「私のことなんていいのよ。お父様は私の五千倍も私の

こと心配していらつしやるんですもの。その上私まで私のことを心配し始めたら、一体どうなってしまうんでしょう。私心配です」

「そうだよ、エリー。お前さんはそうやって自分を心配してなさい。パパはこの人と話をするからね」

「それは構いませんがお父様、私頭痛さんが何をしたのかまだ聞いていませんわ」

偉髭は遂に大きな肩を落として溜め息をつく。

頭痛が痛い。四百九十九万六千五百二十回目だ。

オレはどうとう我慢できなくなつて口を挟んだ。「なあ、お嬢ちゃん、そんなに気になるならオレに直接尋ねたらどうなんだ？その偉髭よりはもうちつと気の利いた返事をしてやるぜ」

すると娘は大きな目をぱちくりさせて、それから顔を輝かせた。

「そうですね！なぜ最初からそれを思いつかなかったのでしょうか。お父様も不親切ですわ。最初からこうしろと言つてくだされば良かったのに」

「ああ、エリー。お前さんはこんな犯罪者と口を利いてはいけないよ」

「じゃあ頭痛さん、お訊きしてもよろしくて？貴方はどうして捕まつて、こんな所にいらつしやるの？：ああ、お気を悪くなさらないで。貴方が有名なのは存じております。お名前はかねがね噂で聞きますもの。《ヘッドエイク》がどれだけ凶悪で、どれだけお父様方警察を手こず

らせたか。でも肝心の『凶悪さ』の中身となると、お父様が意地悪をして最後まで教えてくれないの。ねえ、貴方はどんな罪で捕まりましたの？」

「それはオレが『首領エイク』だからさ」

「貴方が『頭痛さん』なのは存じております。私が興味を持つているのは、頭痛さんがどんな悪事をなされたのか。だって私最近ミステリ小説にハマってますの。シャーロック・ホームズ、アガサ・クリステイ、江戸川乱歩に御手洗潔……」

探偵と作家がごちゃごちゃだ。めちやくちやだ。まあ、綻びた世界の綻びた本棚を持つ綻びたお嬢ちゃんだから仕方ないことだが。

「それで、頭痛さんはどんな犯罪を？詳しく、仔細に、余すところなく教えてくださる？」

エリー嬢はいつの間にか格子のすぐ前まで歩み寄り、好奇心に光る瞳でオレを見つめている。彼女の期待に応えるべく、オレはありつたけの茶目つ気を發揮して言うてやる。「ハート泥棒♥」

「まあ、素敵。殿方の心^{ハート}を奪うのね」

後ろで偉髭がこれでもかと眉をしかめていた。眉間の皺にまな板が挟めそうだけ。残念な偉髭だ。オレ一流のユーモアが分からないなんて。

頭痛が痛い。四百九十九万六千五百二十一。雨が降っ

ていた。あの日も頭痛が痛かった。気圧が低い日には、とりわけ頭痛が痛い。この頭痛がなけりや、あの日雨が降らなけりや、オレはあいつをあんなにも不幸にせず済んだのかも知れない。そしてオレは今でも「ハート泥棒」を続けていたのかも、知れない。

「昔の話だけだな。ハート泥棒は随分前に引退したんだ。パクられる前は徒党組んでせいど追いはぎみたいなことやってたよ。時代遅れな『盗賊』なんてスタイルでね」

「せこいだなんて。謙遜なさらないで。あなたは是非倫敦の裏通りの王様なのでしよう？お父様はよく愚痴っていましたよ。『またもや『首領エイク』を取り逃がした。奴はいつでも私の頭痛の種だ』って」

そうなのか？と目で問いかけると、偉髭はふん、と鼻を鳴らした。

「随分お強いんですってね」

「昔はそう言われてたな。だが今はどうか。一年半の牢獄暮らしで体はすっかりなまっちまってるし、

《固定観念》も取り上げられちゃったし」
ステレオタイプ

『ステレオタイプ』？」

「オレの愛刀さ……おい、ちゃんと保管してくれてるんだらうな？」

後半は警視に対する問いかけだ。しかし偉髭の奴、気まづそうに目をそらしやがった。頭痛が痛い。四百九十九万六千五百二十と二。こりや絶望的だな。

エリー嬢は牢の中に散らばる囚人たちをぐるりと見渡し、オレが踏んでいるデブの、だらりと牢の外に伸びた腕をつんつんとつつく。偉髭が「こら、触っちゃいけない！」と怒鳴るのにも構わずに、つつかれたデブはぶるぶる揺れるが、目を覚ます気配は無い。

「これ、頭痛さんが全部？」

「まあな」

「なまっています？」

「もしかしたら、それほどでもないかも」オレはちよつと肩をすくめておどけてみせる。

「それは好都合だ」オレとエリー嬢の間に割り込みながら偉髭が言った。「お前に頼みたいことがある」

「オレには無いね」

「私にもありませんわ」

「おい、看守、お前はどうかだよ」

「なんで俺に振るんだよ。意味分かんねえ。お前に頼みたいことなんてねーつつーの」

オレは大げさに「ふうっ」と溜め息を吐く。「三対一、だな」

「だから何だというのだ」

「オレに頼み事をする、というアイディアは、この場において民主的に否決された、ってこつた」独断と偏見法第千八百二十と六条【偉髭によるオレへの頼み事はこれを禁止する】の成立だ。「四人、^{ぐうすう}つつーのはいささか多

数決に不適だが。せめてもうひとりいりやあ良かったんだけどな」

「あの……」オレの尻の下から声がする。「おれはあんたに頼み事があるんだが」

「なんだ、椅子。起きたのか」

「おれの上からどけてくれないか。重くてかなわねえ……」

「るせえ。重いとか言うな」

オレは目覚めたばかりの入れ墨マツチョの顎に踵で蹴りを入れる。可哀想な入れ墨マツチョは再び気を失う。独断と偏見法第四十と三条【オレの体重の話題は、これを禁じる】だ。

「……依然として三対一だが。どうする？」

「お前に頼みたいことがある」偉髭は言う。

「何最初からやり直そうとしてんだって。……そーいや、あいづらは、どうしてる？」

「あいづら？さて、知らんな」

偉髭は唇を歪めて苦々しげに言った。どうやらこちらは大丈夫らしい。たよりが無いのは元氣な証拠、つてか。オレがこの一年半牢獄でたらたらしてたのもあながち無駄じゃ無かつたみたいだ。「約束、守ってるみたいだな」

「知るか。市民の模範たる我々似非倫敦市警は犯罪者と取引などしない」

「じゃあ、頼み事もナシってことで」

「……」

偉髭は赤くなったり青くなったりしながら懸命に怒りをこらえている。奴はさつきと偉くなつたからな。下手に出るのに慣れてないんだらう。あいつらが自由な今、偉髭にはオレに提示できる交換条件が無い。オレが「命令」なんぞに従わないのは奴も骨身に沁みてるはずで、何かをしてもらおうとするなら「お願い」する以外に方法が無いのをよく分かつてるんだ。

「た、たのむ……」赤青してた偉髭は遂に白くなると、絞り出すように言つた。

「えー、何？聴こえなーい」オレはもう一息いじめてやる。

「聴こえませぬわ。お父様」

おや、思わぬ所から援護射撃が。可哀想に偉髭のやつ、

鳩が散弾銃喰らつたような顔してやがる。
ショットガン

「おい看守、お前はどうかよ。聴こえたか？」

「だからなんで俺に振るんだって、意味分かんねえ。そもそもなんだ、何の話だ？俺聞いてなかつたぜ」

オレはわざとらしく「はぁ」と溜め息を吐く。「三対一、だな」

「だから何だというのだ」

「お前の発言は、この場において民主的に聴こえなかつたことになつた、つてこつた」独断と偏見法第千八百二十と七条【偉髭による発言はこれを無効とする】の成立だ。「四人、つてのはいささか多数決に不適だが。せめ

てもうひとりいりやあ良かった」

「ええと……」オレの足の下から声をする「おではきこえた」

「なんだ、足置き。起きたのか」

「おで、きこえた。こいつ『たのむ』つて、ゆつた……」

「るせえ。んなこと知つてんだよ。黙つてろ」

オレは目覚めたばかりのデブの柔らかい顔面に蹴りを入れる。柔らかいデブは再び気を失う。

「……依然として三対一だが。どうする？」

「お前に頼みたいことがある」偉髭は言う。

「また最初からやんのか？警視つてヒマなんだな」

ここを出たら警視にでもなるうか。このオヤジがなれるんだ。オレなら二日でなれるだらう。……前科くらい

大目に見てくれるよな？

「お、お前につ。た、頼みたいことがあるつ」

「あら、えらひげさん。どうして泣きそうなの？」

ポキリと心の折れる音がする……この娘、相当なDSだな。もしかしたらオレより上かもしれない。甘く見て悪かつたな。警視は四角いしましまの視界から一度退場して、監獄には奴がハンカチで鼻をかむ音が響き渡る。看守が床をのたうち回りながら笑つている。

赤い目の警視は牢の前に戻つて来ると、えへん、と咳払いをした。先ほどよりも更に三年ほど老けたように見える。

「オマエニヒイ」

あ、声裏返つてる。えへん、えへん。と偉髭は実用的な咳払いをする。

「…お前に頼みたいことがあるんだ」

「いいよ、話くらい聞いてやる」オレだつて鬼じゃない。さんざんコケにして終わりじゃあまりにもこのおっさんが不憫だ。

偉髭は心底ほつとした顔で髭を撫でた。

「エイク、お前は《開閉魔》チャック・ザ・ジツパーの名を聞いたことがあるか？」

オレは思わず吹き出した。神妙な顔をして何を言うと思えば。

「チャック・ザ・ジツパーあ？なんだ、そりやあギヤグか？面白すぎるぜ」

「その様子じゃ知らないようだな。今、巷で噂されている殺人鬼だ」

なるほど、オレの後輩かよ。ジャック・ザ・リツパー《切り裂き魔》の真似事は名前だけじゃない、つてか？

「で、その《開閉魔》がどうしたつてんだ？良くも悪くも似非倫敦市警は市民の噂話なんざじや動かないはずだろう」

「これを見れば分かる。エリー、こちらへ来なさい」

父親に呼ばれて、笑い転げる看守を更にくすぐつていたエリー嬢がこちらへやってくる。笑い死にを辛くも免れた看守は「い、意味分かんねえ…」などと言いながら

荒い息をついている。とことんいじめられっ子だな、こいつ。

「君は席を外してくれるかね」警視は看守に言った。

「ち、ちよつと待つてください…」

看守はしばらくひいはあ言つてから、やがてよじれた腹を抱えて消えていった。看守の姿が階段に消えるのを見届けると、警視はこちらに向き直る。

「さあ、エリー。この人に背中を」

エリー嬢は鎖くとドレスの肩に手をかける。それから少し戸惑つて、偉髭に無言で視線を送る。偉髭はどうした？と視線で答える。

「お父様もせめて後ろ向いていてくださらない？」

「あ、ああ。すまないね」

警視はいそいそと後ろを向いて、偉髭改めエロ髭になる事態を免れた。

警視が後ろを向いてしまうと、エリー嬢はドレスの上をはだけて背中を見せた。その背中には、大きなジツパーがついている。左の肩甲骨から、右の腰へと走る金属の筋。

「…おい偉髭。お前にキグルミを娘と呼んで可愛がる趣味があるとは知らなかつたな」

この中に誰が入つてるとすれば、そいつは針金みたいに細いに違いない。

「馬鹿を言うな！」偉髭が怒鳴る。

「お父様、まだ振り返つてはいけませんわ」

「あ、ああ。すまない」偉髭は壁に向かつて言う。

「：中の人が居るってワケじゃなさそうだな」

「これが《開閉魔》の標的の印、だ。これをつけられてから《開閉魔》に出会った人間は、確実に死ぬ」

「出会わなくても人間は確実に死ぬけどな」

「茶化すな。最後まで聞け。《開閉魔》はターゲットを決めると、こっそり印をつける：見ただろう。それがこのジッパーだ。背後から忍び寄り、斬りつける。だが痛みは無く、標的は触れられたことにすら気づかない。我々が調査したところ、ジッパーをつけられていることにも気づかずに生活している女が、五人見つかった。そしてそのうち三人が、護衛のいかにもなく殺された」

「私がこれをつけられたのは劇場の帰りでしたわ。大変込み合っていました。帰って服を脱いだら、初めて背中にこれがあることに気づきましたの」

「能力か」

警視は頷く。二度目に遭遇したとき、《開閉魔》は背中のジッパーを開けて『中身』を取り出す。当然被害者は即死、だ。取り出された『中身』は現場から持ち去られていた。加えて、奴は被害者を番号付けしてひとりずつ殺している」

「おいおい、勘弁してくれよ。そいつは…」

「そう、お前の手口にそっくりだな」

「模倣犯だっただけか？」

「その可能性は否定できない。：いや、我々はそう考えている、と言った方が語弊がないか。似非倫敦市警が《ヘッドエイク》の逮捕を公表して以来、似非倫敦における能力犯罪は三割減った。犯罪者どもにとってお前の名はそれだけの意味を持つ」

「褒めんなよ。照れるぜ」

オレはおどけてみせるが、偉髭は固い表情を崩さない。「お前への依頼は《開閉魔》チャック・ザ・ジッパーの討伐だ」

「討伐？逮捕じゃなくて、か？」

「警官以外の者に逮捕権限は無い。：我々として努力はした。だが奴の能力は特別なのだ。認めたくないが、我々の有する戦力では太刀打ちできない。これまで三度の接触はすべて我々の敗北に終わった。派遣した部隊は三度も全滅だ。これ以上損失が出れば、警察機能に支障をきたす。もう失敗は許されないのだ」

「だからって犯罪者に討伐の依頼かよ。娘にツバつけられたからってアタマに血い上り過ぎじゃねえか？なあ偉髭え。市民の見本がそれいいのかよ？」

「構わん。似非倫敦市警は、私とお前が法を逸脱する害悪よりも《開閉魔》を放置することがもたらす害悪の方が大きいと結論した。二ヶ月前、最初の被害者が出てから既に五十四人が殺されている。これは犯罪史上稀に見る数とペースだ。：この調子で殺人が続けば、そう遠く

ない未来にお前の『記録』が破られることになるだろう。繰り返すようだが《ヘッドエイク》の名と、それに付随する伝説とが犯罪者に与える影響は大きい。そしてそれが破られることにもまた、大きな意味がある。それはお前も分かっているだろう」

それでオレにお鉢が回つて来た、つてことか。《開閉魔》が模倣犯で、「記録」を意識してるとしたら、そいつはオレをなぞりオレの「記録」を破ることによつて、間接的に《ヘッドエイク》を打ち負かそうとしてるつてこつた。だがホンモノの《ヘッドエイク》が牢屋から出て、奴の前に姿を現したら？直接的な勝利を得るそのチャンスを模倣犯が逃すはずが無い。

頭痛が痛い。四百九十九万六千五百一十と三。

チャック・ザ・ジッパーなんて巫山戯た野郎のせいで、またウニが暴れ出しやがつた。つまんねーこと思い出させやがつて。…何が模倣犯だ。何が「ハート泥棒♥」だ。

殺人鬼め。雨が降つていた。あの日も頭痛が痛かつた。気圧が低い日はとりわけ頭痛が痛む。

「騙されねーぞ。『模倣犯』だ、なんて言えば、オレが怒り狂つてそいつをぶつ殺しに行くんでも思つてんだろ。言つたよな？殺人鬼はとつくに引退したんだよ。『記録』なんぞ知るか。勝手に破らせとけばいい」

「そうはいかない。似非倫敦はお前の持つ抑止力を失つてはならないんだ」

「それはタテマエだろ。本音を吐けよ」

偉髭はぐつと言葉を詰まらせた。呼吸すらとめた数瞬の沈黙の後、偉髭は固く握りしめた拳を振るわせながらいつた。

「娘を、娘を助けてくれ…！このままでは奴を捕らえる前に娘が殺されてしまう。奴は常に複数人の標的をキープしている。そしてマーキングの順番に関わらず、気に入った娘から殺していくんだ。現在判明している『ジッパー付き』はふたり…。次にも娘は殺されるかもしれん。頼む…。お前にしかできないんだ」

「やだね。大体なんでオレがお前の娘を助けてやらなきゃなんねえんだよ。『抑止力』を失いたくない、つてんなら、コトが終わつた後、オレはまたここに逆戻りだろ？オレに一体何のメリットがある」

【独断と偏見法第二十条】釣り合わない取引は、これを**禁ずる**だ。

偉髭は苦しげに唸つて俯いた。「だから『頼む』と言っているのだ…。ムシのいい要求だということとは分かっている。しかし…」

「お父様、私は頼んでいませんわ」それまで沈黙して話を聞いていたエリー嬢が口を開いた。「私の命のために、頭痛さんに人殺しをさせるなんて。そんなこと私は望んでいません。《開閉魔》など怖くはありませんわ。自分で捕えてみせます」

虚をつかれた。次はこの嬢ちゃんが「私を助けてくだ

さい」と泣きついてくる番だと思つていたんだが。さつきからズレた嬢ちゃんだとは思つていたが、まさかここまでとはな。殺されちゃうのが本当にもつたいない。

「聞いたかよ。嬢ちゃんのがよっぽど大人で、よっぽど理に適つてる。…二対一だな。お前の頼み事は民主的に否決されたぜ。三人つてのは多数決にびつたりだしな。話はこれで終わりだ。帰れよ偉髭」

「……見損なつたぞ。この意気地なしがつ」

「そんな科白はとつくに聞き飽きたぜ。殺人鬼を辞めた時にな」

「……お父様、帰りましょう」エリー嬢が警視の袖を引く。

偉髭は暫く牢の前でぐずぐずしていたが、やがて踵を返すと、四角いしましまの視界を去ろうとした。広い肩幅のシルエットが動く、その後ろから古い椅子が姿を現す。

「なあ、ちよつと待てよ偉髭。ひとつ訊きたい。ここの看守、前は白髭の爺さんだつただろ？あの爺さん、どこ行つちまつたのか知らねえか」

「……死んだよ。ひと月ほど前に《開閉魔》に『開けられて』な。奴が標的とするのは基本的に女だけだ。だが爺さんは運悪く奴の犯行現場を目撃したらしくてな。その場で殺された。私は写真で見たに過ぎないが、それでも現場は酷いもんだつた。野次馬どもが言つていたそう

だよ。まさに《ヘッドエイク》の再来だと」

「へえ：そうかよ」

頭痛が痛い。四百九十九万六千五百二十と四。

頭痛が痛い。四百九十九万六千五百二十と五。

頭痛が痛い。四百九十九万六千五百二十と六。

悪意の負債は溜まつている。溜まつている。

世界はよほど、オレが嫌いらしい。

「待てよ偉髭。もう一度、話を聞かせろ」

そして数時間後、オレは一年半ぶりに似非倫敦の空を仰いだ。

「エイクう！つ！会いたかつたよお」隠れ家から飛び出して来たシェリが、大声で叫びながら抱きついてくる。

「愛してるっ。超愛してるよお」

綺麗な翡翠色がオレをちよつとだけ見上げる。相変わらずキラキラ輝くその瞳がしかし、記憶よりずっと間近にあつてオレは心底ビビる。

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百十二。

「は、放せバカっ！」

「えゝ。なんで？」

「こーゆーことは公衆の面前で言つたりやつたりしちゃダメなの」

「えゝ。前は普通にしてたよ？」

「それはお前がちっちゃかつたからで……」ムシヨ帰り

のオレがそう身長の変わらない金髪美少年に抱きしめられて愛してを連呼されるの凶は、まだ日も暮れないストリートには幾分相応しくない。独断と偏見法第五百四十と七条【公衆の面前でいちやつくことはこれを禁じる】だつての。「それにしても、デカくなつたなあ」
「うん、成長期。もー超成長期なの。声もちよつと低くなつてきたし」

それにはオレもすぐに気がついた。子供にとつての一年半が、大人^{オレ}の一年半とはまるで違う意味を持つことを改めて実感させられる。その成長過程を見ることが出来なかつたのはちよつと寂しい。……寂しい？くそつ。天下の大悪党ヘッドエイク様が久々に懐かしい面を見たからつておセンチに浸つてんじやねえよ。

「シエリのくせに生意気だつ！縮め。今すぐ縮めつ！」
「無理」

「何だとこのやろー。いっちょまえに口答えするようになりやがつて。お前なんかこうしてやるつ！」

「…あのー、お頭？おいらたちは完全無視ですかい？」
「無視ロポ。酷いロポ」

シエリをぐりぐりする手を止めて声のした方を見ると、痩せた小男とブリキのバケツを被つたおっさんがつっ立っている。

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百十と三。
「誰だつてお前ら？」

「そりやないですぜお頭」

「忘れたロポ。酷いロポ。相変わらず人でなしロポ」

「嘘だよ。ばーか」立ち並ぶ懐かしい顔に微笑む。「ホスゲン、イペリット、それにシエリも。ただいま」

「笑つたロポ。偽物ロポ。本人じゃないロポ」

「おやおや、この世に遍く頭蓋の敵《首領エイク》は何処へ行つたやら。ムシヨですつかり更生しちまつたんですかい」

「心配すんな。オレなら相変わらず頭^{ヘッドエイク}痛だ。これはアレだ、お前らが思つたよりずつとアホ面だから笑つてんだよ」

「あはは、ふたりはアホ面だつてー」

ナチュラルに自分を除外したシエリがきやはは、と笑い、ホスゲンとイペリットはしよぼくれた顔をする。そんな様子を見て思う。ああ、やつと家に帰つてきましたよ、と。

「お前ら、オレ不在の間、元気にやつてたかよ。まさか『清く正しく』なんて盗賊道に背くような生き方してなかつたろーな」

「そりやあもう。相変わらず『セコクキタナク』やつてましたとも」ホスゲンがどんと胸を叩き、

「シエリも盗賊が板についてきたロポ」イペリットがブリキのバケツをかぼかばいわせて頷き、

「エイクが居ない間も、ボクたち頑張ってたんだよつ。偉いんだよ。超偉いんだよ」シエリがきやはは、と笑う。

「なんだ。まるでオレが居なくても大丈夫みたいな言い様じゃねえか」

「そんなことありやしませんよ。あつしらにやお頭が必要でさあ。盗賊団は魚みたいなモンなんですからねい」
それでお頭たるオレは水みたいなもんだってか？ベタだな。でもまあ、褒められて嬉しくないかといえは……まあ素直に受け止めてやんのもやぶさかじゃないというかお頭ゴコロというか、

「そのココロは？」とイペリットが言う。

「盗賊団も、魚も、オカシラ付きのが見栄えがしまさあ」
頭痛が痛い。四百九十九万六千八百十と四。頭蓋骨の中のウニが、四方八方に鋭い針を発射する。お前はもはやウニじゃねえよ。ウニじゃねえならなんだ？クリカ。

「だれうま」

『誰が巧いこと言えと？』ってやつですかいい？』

『誰が生まれてこいと？』ってやつだ』

「おかしらは相変わらず激辛ですわねい」

「これでもまだ中辛程度のもりだけだな」

「お頭、どうして急に釈放なんですかい？」

「このタイミングで言う嫌がってるようにしか聴こえないが」

「ソナナコトアリマセンッテ」ホスゲンは妙なイントネ

ーションで答える。

「全部カタカナで言ったロボ」イペリットがホスゲンを指差した。

「余計なこと言うもんじゃねえよ」小男のホスゲンは伸び上がってイペリットの頭をパコンと叩く。イペリットのブリキのバケツみたいな頭が、地面に落ちてがろんがるんと転がった。首の無いイペリットは慌てて頭を追いかける。それを見ていたシエリがきやはは、と笑った。

「なあ、何度も訊くがイペリット、お前は何者なんだよ」
「イペリットはロボだよ」
「イペリットはロボだよ」と何故かシエリが答える。
「イペリットはロボだロボ」とイペリット自身も自信満々に言う。

『ロボ』がなんだか知らねえけどよ、ロボは語尾に『ロボ』をくつつつけて喋ったりしないと思うぜ』

「え、それでもイペリットはロボだよ」

「ういーんがしやん、ういーんがしやん」

「ほら、『ういーんがしやん』って言ってるし」

「明らかに口で言ってるだろうがっ！」オレはキレル。独断と偏見法第千とんで一条【イペリットがロボだなんて認めない】。

このパターンもかれこれ七度目だが、それでもシエリは初めて聞く笑い話のように笑った。まったくうらやましい脳みそだぜ。

「で、おいらの質問は完全スルーですかいい」

「心配すんな、忘れちゃいねえよ。ただ、ここでベラベ

ラとぶちまけるには少々厄介な事情だからな。中で話そう」

ホスゲンは頷く。

「そしたら積もる話もあるだろうが、その前にちよつとだけ眠らせてくれないか？ここんとこ……というか一年半ばかり、寝不足でな」

「確かに酷いクマでさあ。牢獄つてのはそんなに寝心地が悪いんですかい」

「集団房に居たからな。おちおち眠れやしない」
ホスゲンは眉をしかめた。

「そいつあ、酷え。辛い目に遭いませんでしたか？お頭、見た目だけはかなりのもんですからねえ」

「なあホスゲン、お前最近自殺願望でもあるのか？オレに相談してくれば『プロ』の方法をいろいろと提供できるが」

可哀想な小男は真つ青になって「滅相も無い」とかぶりを振る。オレはふう、と溜め息をついた。

「オレを誰だと思ってる？辛い目に遭ったのは向こうだけさ」

「ま、そりや当然そうでしょうねえ」つまらんことを訊いてすんません、とホスゲンは頭を掻く。

「だけどな、雑魚を辛い目に遭わせるのだからそれなりの体力と時間を使うんだよ。すつかりヘトヘトだぜ」

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百十と五。疲れと眠気を伴った痛みは、痺れるような甘さを纏っている。飲

み込まずにはいられない、甘い毒のような痛み。眠ってしまったら二度と目を覚まさないような。しかしそれでも明日はやってきて、頭痛は痛む。

「今晚はせゆつくり休んで下せえ。ちよつとしたご馳走も用意します」

「イペリットが作ったロボ」

「ボクも手伝ったよー。包丁で人差し指と人参と親指と中指切ったんだー」

殆ど指じゃねえか。見ればシェリの指は絆創膏まみれだった。おいおい。大丈夫かよ。

「味はともかく、腹一杯喰えるくらいあるんだろうな？オレの胃袋の威力忘れたとは言わせないぜ」

「大丈夫ロボ。お頭が帰って来ると聞いたたら、お頭を慕う街中のごろつきどもから炭水化物に炭水化物、それと炭水化物が集まったロボ」

「炭水化物ばつかじやねえか」
「みんなお頭の好みを心得てるんでさあ」

独断と偏見法第二百四十条【炭水化物をおかずに炭水化物を喰うことは、これを認める】だ。腹が満ちれば、それでもいい。

「まあいいさ。たらふく食ってから寝るとしよう」

「喰ってすぐ寝ると牛になりますぜ」

「歯を磨きやあ齧歯ウシになんざならねえさ……そーいや、アレも作ってあるか？」

「当たり前前ロボ。フィツシュ&チップスは主食ロボ」
「ならいい。久々に喰いたかったんだ」

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百十と八。

オレは夢の中でも呟く。

寝ている間も、魂が体を離れても、この脳みそは相変わらず頭蓋骨の中に居座つて、オレを痛めつけ続ける。頭痛が痛い。三百六十二万二千とんで五十と五。

「なあ、あんた。あんたはオレのこと愛してる？」

百二十と七番目の犠牲者。その震える唇に耳を寄せるが、聞こえてくるのは弱まっていく呼吸ばかりだ。

「オレはあんたの大事なモンを奪った。そんなオレを、あんたは愛してらって言えるかよ」

返事は無い。

オレは上手に奪うから、犠牲者には死の間際におしゃべりを楽しむ時間が存分に与えられる。神に祈る者がいた。家族や恋人の名を呼ぶ者がいた。略奪者オレにありつた。家の呪いを吐きかけて息絶える者がいた。

百二十と七番目はその中で最もつまらない死に方をした。ただ無言で、弱って、何も訴えずに死んだのだ。せっかく与えてやったのに。最期の言葉を語る時間、ありふれた死を特別なものにする機会を。それを放棄する自

由、与えられた者の自由をオレは心から嫌悪する。記憶の中で微笑む百二十と七番目の顔に、オレは唾を吐いた。

頭痛が痛い。三百六十二万二千とんで五十と六。

ある小説家は倫敦を「灰色」と形容した。天才の頭蓋骨に詰まった、滑らかでよく回る脳みそもまたそう呼んだ。だが似非倫敦に存在するオレは、一度だって天才の脳みそを開けてみたことなんざない。だからこそもオリジナルと同じ灰色をしているかどうかオレには分からない。

良く見知った色でこの街を形容するとしたら、似非倫敦はむしろ「肺色」なんだ。この街では天才も馬鹿も男も女も子供でさえも煙草を吸う。ぼっかり抉れた胸の中から覗く肺の色は、誰も彼もこの似非倫敦の空みたいに腐っている。「肺色」がどんな色かと訊かれれば、そりゃまあ、灰色なんだが。

オレは煙草を吸わない。酒も飲まない。クスリもやらない。似非倫敦の裏通りに住まう隣人たちはそんなオレを好奇の目で見るが、自らの体を破壊して享樂を得られるのは、初めからなにもかも「与えられて」生まれた者の特権だ。奴らは自らを少しづつ少しづつ痛めつけて、自分があたかも「奪われた」者であるかのように振る舞う。そうやって作り物の自己憐憫に浸り、或いは神に背き自分から天恵を放棄するその自由を喜ぶ。

オレは違う。
オレは奪われて生まれてきたんだ。憎まれて生きてきたんだ。
生まれた瞬間から神に：世界に憎まれていることを思い知らされた。

この頭蓋骨いっぱい詰り込まれた毒が、オレから全ての喜びを奪ったのだ。
どのミリ秒マイクロ秒にも火のように降り注ぎ、膿のように染みだし、腐敗臭のようにまとわりつくこの痛みが、全ての感覚を上書きする。

朝の日差しは焼けた針のよう。
鳥のさえずりは不協和音。
顔を洗う水の絶対零度が、細胞のひとつひとつを凍死させる。

焼きたてのパンの香りは頭蓋骨に巢食う青黴どもを歓喜させ、
咀嚼する全ての食物が、内側から喉を喰い破ろうと牙を剥く。

話しかけるな。お前の声は軋る金属のようだ。
オレに触れるな。お前の指は剣のように鋭い。
オレと目を合わせるな。お前の視線には鉄がついてい

る。
一人の痛みを理解しなさいと言う誰もが、オレの痛みを理解しない。

エイク、皆に優しくしなくてはだめよ。

だめよ。

だめなのよ。

あなたはだめなの。

「汝の隣人を愛せよ」と主張する誰もが、オレのことを愛さない。

施しは要求されるばかりで、為されることが無い。

所詮言語が違うのだ。彼ら与えられた者と、オレのように奪われた者では。

奴らは信じて疑わない。隣人が自らに施すべき「余刺」を持っているに違いないと。全ての隣人が、自分のように患われた存在なのだ。

だからオレは誓う。

『汝の隣人を、廃せよ』と。
全ての隣人がオレの敵。

独断と偏見法第三条（全ての敵を減ぼすまで、オレの戦争は継続する）。

頭痛が痛い。三百六十二万二千とんで五十と七。

どん。

ふいに肩がぶつかった。

シゴトの時間が来たのだ。

夕暮れの似非ストランド通りは人通りが多い。ウニと会話しながら歩いていれば、いつか必ず誰かにあたる。

犬も歩けば棒にあたるっていうくらいだ。オレもこいつ

も、犬と棒よりかなり大きい。

「おっと、すまない。よそ見をしていたんだ」

糊のきいたスーツに身を包んだ、紳士風の男はちよつと帽子を上げて謝る。小柄だが、スーツの下の肉体はよく締まっているように見える。胸にちいさな勲章が光る。左足に体重をかけ、右足を庇うような立ち方をしている。退役軍人ってどこか。

「こちらこそ。少し、ウニニ」

「ウニニ？」

「：いえ、少し考え事をしていましたものですから」

「ケガ、無いかい？」

毛が無いのはお前の方だよ、と上げた帽子の下を見て思うが、口には出さない。シゴトに差し支える。何より今のオレには幾分似合わない科白だ。

「ええ、大丈夫。ありがとう」毒を吐く代わりに、とびさりの営業スマイルでそう答える。男は微笑みを返した。

つくりもの
微笑みを、返した。

：笑った！笑いやがったな。皮膚が泡立ち、総毛立つのを感じる。

こいつ、オレに向かって笑いやがった。決まりだ。百二十と八番目はこいつだ：！独断と偏見法第四十四条【オレに向かって笑った人間は、優先的に殲滅すべき敵と見なす】。

全身に血が滾り、頬が紅潮する。オレは開ききった瞳

孔を隠すために俯いた。

紳士風の百二十と八番目には、恥じらって目を伏しているとても見えているらるか。優しげな微笑みを絶やさずにいる。

「：あ、肩に口紅が」

はやる心をなんとか御して、百二十と八番目の肩に手を伸ばす。指先の赤が奴のスーツに付着した。百二十と七番目の血だ。

「きつと、さっきぶつかった時についてしまったんですね」スーツをそっと挿んだまま言う。獲物が逃げださないように、見えない鉤爪を突き立てて。「立派なスーツですのに、申し訳ないことをしてしまいました……」

「安物だよ。気にしないで。これから誰かに会う約束があるわけでもないし」

百二十と八番目はスーツの赤く染まった部分を軽く払うと、オレの手をそっと挿んで外そうとする。オレの手に触れる百二十と八番目の、そのこなれた抵抗の無さに虫酸が走る。

「そうは参りません」逃がしてたまるかよ。オレは百二十と八番目の手を握りかえず。「洗濯代くらい出させてください」

百二十と八番目は「そんな、とんでもない」と頑なに拒む。ここまで予定通り。

「でもそれではわたしの気が済みません：：そうだ！お茶を一杯ごちそうさせてください。御用事、無いんでしょ

う？」

「しかし……」

「いけませんか？」

上目遣い。このオレが。反吐が出るぜ。野郎がまんざらでもなさそうな顔をするのが余計に吐き気を誘う。だがこれもシゴトのためには必要なことだ。

頭痛が痛い。三百六十二万二千とんで五十と八。百二十と八番目はぐずぐずと頭を掻いている。こいつが落ちるまであと少し。

痛みに満ちた毎日の中で、「死事」に臨むこの高ぶりだがオレの心と体を満足させてくれる。それが憎き隣人を廃するためなら、なんだって愛してやるよ。それがたとえ堪え難い嘔吐感でも。……なんとという反吐性愛者。変態的ワーカホリアル死事の虫。

頭痛が痛い。三百六十二万二千とんで五十と九。早く。早くこいつを殺らないと。頭痛の間隔が狭まっている。この頭痛を鎮めるために。感覚の奥深くに沈めるために。

早くお前を殺させてくれ……！

頭痛が痛い。三百六十二万二千とんで六十回目。

「すまない」突然男が言った。

「……はあ？」思わず声が漏れて、慌てて口を咄む。なんだと？

「すごく魅力的な申し出だけど、それを受けることは出来ないよ」

ここまで焦らしといてそりゃあないぜ。次の手を打つには遅すぎる。

見つけた獲物を全て首尾よく狩れるとは限らない。釣れずに逃す獲物もいるが、こいつは確実に落ちると思っただのに。

「どうして」自分の声が演技になっていないのを感じる。もっとも、相手にそれがバレるようなことはないだろうが。

「今日は息子の誕生日でね。プレゼントらしいプレゼントも買ってやれなかったが、それでも早く帰って祝いたいんだ」

頭痛が痛い。三百六十二万二千とんで六十と一。そうかよ。愛する家族のため、ってか。

胃の底から怒りが沸き出す。痛みでズタズタの頭蓋から憎しみが膿み出す。

殺してやる。与えられた者。恵まれた者。持てる者。奪われなかった者め。

他の誰を逃がしても、こいつだけは殺らなきゃ気がすまねえ。

頭痛が痛い。三百六十二万二千とんで六十と二。

「君みたいに素敵なお嬢さんの申し出を断るのはまことに心苦しいが……。本当に悪かったね。それじゃあ」

おい、待てよ！

心の中で叫ぶが、百二十と八番目はオレに背中を向ける。

おい行くな！お前は逃しちやなんねえ獲物なんだよっ！

待てよ、待ってっば！

頭痛が痛い。三百六十二万二千とんで六十と二。

頭痛が痛い。三百六十二万二千六十三。

頭痛が痛い。三百六十二万二千六十四。

頭痛が痛い。三百六十二万二千六十五。

痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

「っあ：」あまりの痛みに思わず声が漏れる。

視界が狭くなる。空が高くなる。取り囲む建物が高くなる。百二十と八番目が高くなる。

膝が地につく。

お、おい君！大丈夫か！圧倒的痛みの壁の向こうで、

百二十と八番目が言うのがぼんやりと聞こえる。オレは

百二十と八番目の腕にすがりついた。

「だ、大丈夫です：お気になさらず」

頭痛が痛い。三百六十二万二千とんで六十と六。次第

に普段通りに戻ってきた。普段通りの痛みだ。

「大丈夫には見えないよ。とにかく、どこか休める場所

へ」

百二十と八番目がオレに肩を貸す。

ようやくツキが回って来たみたいだ。不幸中の幸い、怪我の巧妙ってやつか。オレは内心でほくそ笑む。今晩は満月。オオカミに変身する奴らは誰も彼もが苦んでいる。とびきりの痛みの後には、恐ろしい獣がやってくるんだよ。

「すいません、急に目眩がして……。本当に大丈夫です。ひとりです歩けますから」そう言って男から離れ、わざとよるけてみせる。

慌てて支える男に、オレは弱々しくよりかかる。嘔吐感。嘔吐感。

「やっぱりお言葉に甘えていいでしょうか……。この近くに住んでいるんです。家まで送っていただけますか」

百二十と八番目は、ふう、と溜め息をついた。「どっちだい？」

そして、オレの指し示す方へと歩き出す。人目の無い、路地裏へと。

綻びた似非倫敦の、その綻びが淀む場所へ。

こいつはもう、オレの手のひらの上にいる。

頬にぽつりと冷たい滴を感じる。雨が、降り始めている。

頭痛が痛い。三百六十二万二千とんで七十と一。

「手こずらせやがって」

ステレオタイプ

《固定観念》を振るい、炎が燃え移ったスカート下の裾

を切り落とす。

路地裏に打ち捨てられた新聞紙に、吹き溜まった木の葉に、百二十と八番目が放った炎の残骸がちろちろと揺れている。だがそれも、次第に勢いを強める雨にすぐに喰い尽くされるだろう。百二十と八番目の命のように。弾倉を空にした拳銃が、水たまりの中で焼けた銃身を冷やしていた。

手の甲の火傷をべろりと舐める。火照る傷に、ぼつぼつ落ちる冷たい雨滴が心地よい。

百二十と八番目は戦闘においてもなかなかの手練だった。

バイロキネシス
発火能力。

オーソドックスだが、戦闘向きの良い能力だ。百二十と八番目自身の動きもなかなかのもんだった。右足のケガが無ければ、もっと機敏だったに違いない。軍隊ではさぞかし活躍したことだろうな。

「だがそれも、過去の栄光だ。勲章はあの世まで持っていくけない」

煉瓦壁と煉瓦壁と煉瓦壁、加えて殺人鬼に囲まれた行き止まりに、百二十と八番目はだらしなく落ちている。肩で息をしている。オレは百二十と八番目に切っ先を向けた。

「お願いだ…やめてくれ」

「お前には分かんねーだろうがよ、皆がみんな同じコト

言うんだぜ。百二十と八回も同じ泣き言聞かされるこっちの身にもなれってんだ。揃いも揃って一方的な要求しやがって。だったらオレは誰を殺せばいい？お前がもつと手頃なやつをスイセン、シてくれるってんならお前のことは水に流して、やってもいいけどな」

「俺は死ぬわけにはいかないんだ」

「誰でも死ぬよ。死なない人間なんていない」

「俺には息子がいるんだ」

「ああ、それはさっき聞いた」お前の身の上話なんかに興味は無い。下手な時間稼ぎはやめてくれ。退屈なだけだ。

「妻はあの子を生んですぐに死んだ。他に家族はいない。

俺まで死んだら、一体誰があの子を守るんだ？」

「自分で守るさ。少なくとも、オレはそうやって生きてきた」

「守ってやらないと…誰かが傍にいてやらないと……。強欲な連中が、よってたかってあの子をバラバラにしてしまう……」

「今確実に死ぬお前が、これから死ぬ『かもしれない』息子の心配か？随分余裕なんだな」

「なあ、お前が噂の殺人鬼なのだろう？百二十五人も尊い命を奪った」

「百二十と七、だ。お前を入れれば百二十と八」

「お前には人間の心が無いのか。人でなしめ」

あの世で罰が下るぞ。悔い改めなさい。今ならまだ間に合う：ひとしきりの命乞いの後で、突如として説教を始めたのは八十と三番目の牧師だったか。奴も色仕掛けで釣れた獲物のひとりだったな。『善く』生きているはずの奴が、他の誰よりも自らの死を、死後の裁きを恐れているように見えた。その意味で、奴は確かに誰よりも信心深かったんだらう。なあ、百二十と八番目。「人間」ってのがお前らみたいな生き物を指すのだとしたら、オレは「人間」の心なんて一度として持ったことはねえよ。「百二十と八」という数字は「頭痛が痛い。三百六十二万二千とんで七十と二。「たかが爆弾一発で十分に殺害できる人数だ」

百二十と八番目がびくりと肩を振るわせる。そうだ。お前にも後ろ暗いところがあるはずだろう。自分のことを棚に上げて説教をするなよ。与えられた者の傲慢だ。「こないだ大戦があったな。どうせお前もそこで戦ったクチだろうが。我らが女王陛下下の軍隊が隣人の頭上へ落とした爆弾の数を知っているか？」
百二十と八番目は苦しげに嘆息する。奴は知らない。知ろうと思えば知れたはずなのに。戦争などと縁もゆかりもないこのオレでさえ知れるのだから。与えられた者は、奪われた者の醜態から目を背ける。だからこうして、反射した憎しみが鼻先に突きつけられるまで自らの傲慢に気づかないのだ。
「五十六万二千五百三十と八発だ。一体何人死んだらう

なあ。敢えて言いはしなないぜ。オレは知ってるけどな。：そのうちの幾つを、お前は落としたり？お前にニンゲンの心はあるのか？」

「：これは、罰なのか」

「はあ？罰？テメーの死を勝手に神性化してんじゃねえよ。お前は似非倫教に落とされた爆弾『ヘッドエイク』の犠牲者のひとりに過ぎないんだよ。お前の死は単なる数字だ。オレの頭痛のために、パファリンの代わりになって死ねよ百二十と八番目」

頭痛が痛い。三百六十二万二千とんで七十と三。

「どうしても、見逃してはくれないのか」

ここまで心を折ってやっても、眼光を失わない獲物は珍しい。体は傷ついて濡れそぼっているが、百二十と八番目の心はまだ死んでいなかった。問われて初めて、オレは「おきまり」の質問を思い出す。こいつをしとめることばかりに気をとられ、すっかり忘れていたシゴトの前の儀式を。

「：そうだな、じゃあひとつ質問に答えろよ。返答次第では生きて帰してやってもいい」

どうせ求める答えは得られないだろうが。こいつも今までの百二十と七人と同じだ。これは確率論じゃない。可能性の考慮には意味が無い。じゃあこの期待はどこからくるんだらうな。

「なあ、お前はオレのこと愛してる？」

「何…?」

百二十と八番目は怪訝な顔でオレを見る。沈黙の空白を、雨音が埋める。

「オレはお前に酷いことしたよな。これからもっと酷いこともする。お前は奪われて悲しいよな。憎まれて辛いよな。…なあ、お前はそれでも、オレを愛してるって言えるか?」

どんなに世界がオレを憎もうとも、オレは世界を愛さなきゃならないのか?

世界に否定された人間が、世界を肯定することなんてできるだろうか。

オレはその答えが知りたいんだよ。自問自答にはもう飽きた。だからオレは造るのさ。理不尽な他者に何もかもを剥奪された、もうひとりの奪^オれた^レ者を。

「ああ、愛している…」

そう言えいいのか? そう言えば自分は生きて帰れるのか? そう言えばこの地獄は終わるのか? 百二十と八番目の瞳は問いかける。

「そいつあ、嬉しいなあ。だが、それはお前の心^{ハート}からのコトバかよ」

「そうだ…心からの、言葉だ」

そう、答えるしかないよな? 当たり前だ。オレはそう答える以外の選択肢を与えていない。だからここまでの質問は無意味だ。本当に、無価値だ。奪い取った金は依

然として金であり続けるが、奪い取ったコトバはもはやコトバではない。心が、ない。大事なものは心なのだ。心から出たコトバも、口を経れば嘘に変わる。嘘を聞きたくないなら、真実すらも奪われたくないのなら。どうすればいいのか、オレは知っている。

「じゃあ、直接訊いてみようか。お前の心^{ハート}臓に」

百二十と八番目の胸の、真ん中より少し左寄りに。

ステレオタイプ
《固定観念》の切っ先を向ける。

本当に恐ろしいものについて語るとき、人間は陽気になりたがる。おどけてみせたがる。それが自分たちと同じ次元に存在する、という現実から目を背けるために。《ヘッドエイク》の犯罪は、時に冗談めかして《ハート泥棒》などと呼ばれる。その呼称こそ、単なる殺人鬼にすぎないこのオレが「盗賊」なんてカテゴリに括られる所以でもある。《ハート泥棒》は《心臓泥棒》^{ハート}。百二十と七の犠牲者の胸は須くがらんどう。「心から」のコトバを吐いた犠牲者たちは偽善者たちは、皆その真実を「心」に問われて死んでいったのだ。

体外に取り出された心臓を目視するとき、人は自らの命が奪われたことを、自分が奪われた者になったことを強烈に意識する。どんなにぼんくらな脳みそでも、自分が奪われたという事実を自覚せざるをえない。奪ったのが目の前にいるこのオレだという事実を認めざるをえな

い。

「オレはあなたの大切なものを奪ったよ。オレが、奪ったんだよ。そんなオレを、心から許せる？お前をこんな

目に遭わせた運命^{オレ}を、愛してると言えるかよ？」

望んだ答えが得られたことは一度だってない。

たとえば最初の男は妻の名を呟き、

たとえば六番目の男は神に祈った。

たとえば二十と三番目は断末魔を叫び、

たとえば七十と一番目はオレを呪った。

たとえば百二十と七番目は沈黙し、

たとえば百二十と八番目は、息子の名を呼んだ。

頭痛が痛い。三百六十二万二千とんで七十と四。

シゴトの後は、痛みがいくらかマシになる。だがそれも三日と続かない。じきに次の獲物を探さなければならぬだろう。

全てを停止した百二十と八番目の死体を見下ろして、オレは言いようの無い倦怠感にかられる。モノトーンに赤色をぶちまけたような止まった空間に、雨滴だけが落ちつづけている。ふと、視界の隅に光を感じた。百二十と八番目の傍らに、金色の何かが落ちている。金の鎖が血に濡れて、光も当たらないのに火のように煌めいていた。

ロケットか…。

小さな金のロケットが、赤色の雨と灰色の血とに濡れていた。オレには縁のないものだ。閉じ込めておきたい思い出、ひとときも忘れたくない愛しい存在を持たないオレには。

死体のようにだらしなく開いた蓋の間から、透き通った翡翠色の瞳がこちらを見つめている。いかにも「無垢」という言葉が似合いそうな、柔らかい金髪と柔らかい笑顔。世界から存分に「与えられた」人間。嫌悪感に鳥肌が立つ。

百二十と九番目はこいつにしよう。写真だろうが、オレに向かつて笑いやがったことに変わりはない。与えられた幸福を見せびらかす人間を赦しはしない。

オレはロケットに手を伸ばし、指先に鎖を絡める。
右手に百二十と八つ目の心臓を。
左手に断ち切れた金の鎖を。

頭痛が痛い日の空は、今日もハイイロに腐敗していた。

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百三十と六。
…えいく、

「エイク大丈夫？」

薄目を開けると、翡翠色の瞳がオレの顔を覗き込んでいた。笑顔。そう、心配している時にもこいつは笑うのだ。今じゃその微妙な違いも手に取るように分かる。

「なんかねー、エイク超うなされてたよ。うんうん言っ

てた」

「大丈夫、頭痛が痛かっただけさ」

「いつも通り？」

「そう、いつも通り」

ふーん、と唇を尖らせるシエリの頭を、くしゃやくしゃと撫でる。

くるくるの金髪。翡翠色の瞳。柔らかい笑顔。それは夢の中でロケットから覗いていた顔のと同じ顔だ。ただひとつ、右目を隠すように巻かれた包帯だけが、夢の中の写真と異なっている。オレは空虚の上に巻かれた包帯に、そつと触れた。奪われてしまった右目。

「なあ、シエリ。お前はオレのこと恨んでるよな」

笑いながらオレを心配するように、笑いながらオレを憎むことも、お前にはできるんじゃないのか？

「え？」なんていったの、とシエリは聞き返す。そして聴こえる方の耳をオレに向ける。

右耳に口を寄せ、なんでもないよ、と囁いてやると、シエリは笑う。これは安心の笑みだ。昔のオレは知らなかった。笑みにもこんな多くの種類があることを。どんな笑みも笑みであり、口角をつり上げる筋肉の引きつりであり、殺意の対象だった。それがオレにとつての笑顔の全てだった。だからオレには今でも、自然な笑い方というものがよく分からない。シエリのように、笑みだけでどんな感情をも表現する術を、オレは知らない。

「お頭、起きたんですかい」汚れたテーブルでコーヒー

を啜っていたホスゲンが尋ねる。

「ん、まあな。今、何時だ？」

「イペリット、教えてやんな」

「内蔵の電波時計によれば」テーブルの脇に直立不動の体勢で突つ立っていたイペリットが答える。「只今の時刻午前二時三十六分三十秒ロポ。三十一秒ロポ。三十二、

いや三十三秒ロポ」

「つまり夜中だな」

「夜中ですわい」

「ずつと起きてたのかよ」

「盗賊は夜の仕事でさあ」

「コーヒー七杯目ロポ」

「余計なこと言うもんじゃないよ」

小さいホスゲンが伸び上がってイペリットの頭をパコンと叩く。ブリキのパケツのような頭が床に落ちてがろんがろんと転がった。イペリットはそれを慌てて追いかける。こんなとき、いつもならきやはは、という笑い声が續くんだが。そう思つて傍らを見ると、シエリはソファに突つ伏してすやすやと寝息を立てていた。

「お頭、コトが済んだらまた牢獄に戻ちまうんですかい」

「ああ。そのつもりだよ」

「今度はおいらたちの番じゃ、駄目なんですかい？ そもそもお頭が捕まったのはおいらたちのせいだ。それなのに」

「ばーか。オレと交換だから、お前らは釈放されたんだつての。お前らと交換で、オレが釈放されるか。身の程わきまえるよ。シェリの傍であいつを守るのがお前らの役目。オレはまだ牢屋の中に居なきゃなんねーの」

「何故」

「正直、よく分かんねえんだよ。一体どうしたらこの身に溜まった悪意を全部吐き出して、空っぽになれるのか」

監獄で罪を償う、つてのは、悪意の負債の支払い方法としては一番安直で、一般的で、楽な方法だ。なんならギロチン台で一発清算、つてのもシンプルでいい。頭と胴体がサヨナラすれば、この忌々しい頭痛とも永久におさらばできるかもしれないからな。でもオレにとつてその方法が全く意味を為さないことは分かっている。オレが消し去りたいのは法の上の罪じゃない。天から与えられた悪意なのだから。でも、他にどうすればいいか、オレは知らない。昔は良かった。目についたムカつく奴らを片端から折っていればそれで悪意を清算できた。天から降り注ぐ悪意を跳ね返したつもりになった。だが今は違う。頭痛の痛みに任せて誰かを壊しても、昔のような開放感が得られない。ただ、いつか頭痛が消える空白に、けだるい倦怠感が残るだけだ。痛みが罰だと思えば、罪滅ぼしという手段もあるのだろう。だがどんな善行も偽善にしか見えないのだとしたら、オレは行動を停止するしかない。たとえそれが絶対的に間違っていたとしても。

「シェリが『悲しみ』まさあ。あいつ、お頭はもう何処にも行かないと思ってるんですから」

「なあ、あいつ、オレがいない間にまた、奪われたりしてないだろうな？」

「勿論、おいら達がそんなことさせやしません」

「：そうか。そうだよな。オレはお前らを信じてる」

だから、

「だから自分が傍にいらなくても大丈夫、なんて言わせませんぜ」ホスゲンが先回りして言う。「お頭は疲れて弱気になってるんでさあ。いつものお頭なら、頼まれなくても、望まれなくても自分の居たい場所に居るはずですぜ。お得意の『独断と偏見』に従って。お頭はシェリの傍に居たくないんですかい」

「そうだな、オレは疲れてるんだ。：だからもう一眠りさせてくれないか。また頭痛が痛みだす前に」

ホスゲンは「合点了解です」と言うと、人差し指でオレの額をとんと突いた。額を中心にびりびりした波が広がり、オレは自分の上体がゆっくりと倒れていくのを感じる。触れるだけで人を眠りに落とす。それがホスゲンの能力だ。盗みの時には確かに役に立つ。しかしこの眠りに落ちる感覚は、悪事にしては幾分、優しすぎる。

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百三十七。

頭痛が痛い。三百六十三万二千百七十と一。

「見つけたぜ。お前一体どうしてこんな所に居るんだ？」

写真の子供を見つけるのに、二週間もの時間がかかる
とは夢にも思わなかった。オレが不本意な潜伏を終えた
のは百二十と八番目の三日後。本来ならもっと早く動け
たはずだが、百二十と八番目は住所の手がかりとなるよ
うな物を何一つ身につけていなかった。新聞に書かれた
名前と大まかな住所を元に、オレは百二十と九番目の子
供を探した。特定には一日を要した。突き止めた住所を
訪ねるとしかし、そこは既にもぬけの空だった。安アパ
ートの管理人は子供は施設に移されたのだと言う。教え
られた施設へと向かい、オレは愕然とした。子供は何者
かに連れ去られたというのだ。誘拐なんて、この似非倫
敦ではそんなに珍しいものではない。だが百二十と九番
目に身寄りが無いことは、新聞を読んだ者なら誰でも知
っているはずだ。それをわざわざ誘拐するマヌケがいる
とは思えない。あり得るとすれば少年趣味の変態か、そ
ういふ奴らを相手にする人買いだろう。心当たりの人買
いどもを片っ端から締め上げて、情報を集めた。しかし
それでも百二十と九番目は見つからない。そうこうして
いるうちに次第に頭痛の感覚が狭まっていた。普段なら
ばとっくに諦めて、別のターゲットを探している段階だ。
それが何故ここまであの写真の子供に執着するのか、分
からなかった。考えようとしても、押し寄せる痛みが未
だ固まりきらない答えを根こそぎ奪っていく。行動する
以外に、オレに残された道は無かった。

人買いのセンはこれで最後だ、と決めて訪れたこそ泥
どもの溜まり場だった。通りこそ違うものの、百二十と
八番目を殺したあの行き止まりとそっくりの路地に、煉
瓦壁と煉瓦壁と煉瓦壁、加えて殺人鬼に囲まれて百二十
と九番目は落ちていた。膝を抱えて、蹲って。にへら、
にへらと笑っていた。あちこちに痣や擦り傷をつくって、
暴力の描きだす醜い文様のキャンパスにされて、それで
も百二十と九番目は笑っていた。

「聴いてんのかよ」

百二十と九番目は、「へ？」と言って右耳をこちらに向
ける。そんな仕草をする人間を、前にも見たことがある。
九十と八番目。耳を患っていた男。常に顔を右に傾けて、
左耳をこちらに向けていた。

「ちよっと前まで、両方とも聴こえなかったんだがの、
天使がわしに贈り物をくれたんじゃよ……今となって思え
ば、人生の最後にもう一度この世を聞かせてやろうとい
う神サマの粋な計らいだったのかもしれないね。」

奴が呟いた妄言が脳裏に蘇る。コトバの主が黄泉帰る
ことは二度と無いが。

九十と八番目は、頭も病んでいたのだろうか。右耳が
聴こえなかった男。

頭痛が痛い。三百六十三万二千百七十と二。

「左、聴こえねえのか？」

「うん。聴こえないの」百二十と九番目はへらへらと
笑って答える。「おねえちゃん、だあれ？」

オレは虚をつかれた。裏通りを歩く今のオレは、どう見ても「おねえちゃん」ではないはずだ。何故分かる？変装に関して怪盗趣味の変な自負を抱いてるつもりはないが、それでも今まで見破られたことは一度だってない。それなりにシヨックだった。

「どうしてオレが『おねえちゃん』なんだよ」

「へんなの。そんなのに理由なんてないよ？」

へんなおねえちゃん、と百二十と九番目は笑う。

その無邪気な笑いが、いちいちオレの神経を逆なでする。

「お前の父親、殺されたんだろう。どうしてそんなへらへらしてられんだよ」

「ん、かなしく、ない、から？」

そう言い放った百二十と九番目の笑みに、オレの背筋は凍り付いた。どんなに強力な能力者も、八十と六人の武装警官隊も、「怖い」と思ったことなんてない。それなのに。

こいつの心は欠けている。直視できないほど醜く抉れた心を隠すように、透けるほど薄っぺらな笑みが貼付けられている。その笑顔の下の圧倒的虚無が、どうしようもなく恐ろしかった。こんな人間、見たことがない。

「な、何なんだよ、お前：：気持ち悪いんだよっ」

「みんなそう言うんだよね。どうしてだろ、笑うのはいいことなのに」みんな気持ち悪い、って言うんだ、ボクが気持ち悪いから施設も追い出されたんだ、と百二十

と九番目は言う。

「：おい、待てよ。お前、誘拐されたんじゃないのか？」
「え、なにそれ。そんなの無かったよ。ぜんぜん。ユーカーだなんて、おねえちゃんはユーカーなことを言うんだねえ」百二十と九番目はきははど笑う。

嘘か。だが嘘つきはどちらだ？こいつか、それとも施設の奴らか。後者だろうな。嘘ってのは、失いたくないもんを持つてる奴だけが吐くもんだ。こんな空っぽの奴が、嘘を吐く意味なんて何処にもない。……空っぽ？何かがおかしい。だがその違和感の正体が、分からない。

頭痛が痛い。三百六十三万二千百七十と三。

「ねえ、おねえちゃん」

「黙れ。オレを『おねえちゃん』なんて呼んでんじやねえよ」

「じゃあ名前おしえてー」

「っ誰が：！お前なんかにも乗る名前なんざねえよ！」

そう怒鳴りつけると、百二十と九番目はボカンとした顔でオレを見上げた。

「名前、ないの？」

そんなわけないだろ。少し考えりゃ分かる。オレは答えない。眉をしかめるオレの表情を、困っている、どでも思ったのだろうか。百二十と九番目はひとり頷くとにんまり笑った。

「じゃあ、おねえちゃんにボクの名前、あげるねー」

百二十と九番目が言った瞬間、ボクの中の何かが目と揺らぐのを感じた。百二十と九番目から放出された「概念」と形容する以外にない形而上の何か、穴だらけの頭蓋からオレを追い出そうとしている。

「や、やめるっ！お前の名前なんざいらねえよ。早く元に戻せ！」

「分かった！。いらぬならやめるよ」

百二十と九番目は、拍子抜けするほど素直に「攻撃」を止めた。オレに侵入しようとしていた「概念」が百二十と九番目の中に吸い込まれるように戻っていく。精神攻撃だって？純朴そうな顔して、随分とエグい能力じゃねえか。こいつが施設の連中から憎まれ、追いつかれたのだとしたら、それはこいつの能力の影響もあるのだろう。この綻びた世に遍く全ての能力の中で、最も忌み嫌われるのが人の心に干渉し、操る能力だ。このカテゴリに属する能力の持ち主はえてして自分の能力をひた隠しにする。バレれば最後。その力を振るおうが振るうまいが、そいつは徹底的な差別と侮蔑の渦の中に放り込まれることになる。そいつが骨身に沁みて分かってる大人は上手く隠し通すが、まだ世界も自分もよく知らない子供じゃそうはいかない。奴らは信じ込んでいるのだ。自分出来ることは、他者にとっても当たり前のことなのだ。だから話しかけるような気軽さで迂闊に精神操作を行ってしまう哀れなガキもいる。そんな奴らの行き先は、

路地裏の煉瓦壁と煉瓦壁と殺人鬼に囲まれた世界と時の行き止まりだ。この百二十と九番目のように。

頭痛が痛い。三百六十三万二千百七十と四。

一見矛盾しているようだが、百二十と九番目を敵にオレに対する攻撃者と認識した瞬間、目の前の子供に対する得体の知れない恐怖は何処かへ消え去った。独断と偏見法第五条「オレを攻撃する者はその全てを殲滅する」に従い、鞘を払って《固定観念》と敬意を抜き放つ。

「百二十と九番目。オレが欲しいのはお前の名前なんかに従い、鞘を払って《固定観念》と敬意を抜き放つ。

「百二十と九番目。オレが欲しいのはお前の名前なんかに従い、鞘を払って《固定観念》と敬意を抜き放つ。

「百二十と九番目。オレが欲しいのはお前の名前なんかに従い、鞘を払って《固定観念》と敬意を抜き放つ。

「百二十と九番目。オレが欲しいのはお前の名前なんかに従い、鞘を払って《固定観念》と敬意を抜き放つ。

「百二十と九番目。オレが欲しいのはお前の名前なんかに従い、鞘を払って《固定観念》と敬意を抜き放つ。

「百二十と九番目。オレが欲しいのはお前の名前なんかに従い、鞘を払って《固定観念》と敬意を抜き放つ。

「百二十と九番目。オレが欲しいのはお前の名前なんかに従い、鞘を払って《固定観念》と敬意を抜き放つ。

「百二十と九番目。オレが欲しいのはお前の名前なんかに従い、鞘を払って《固定観念》と敬意を抜き放つ。

「百二十と九番目。オレが欲しいのはお前の名前なんかに従い、鞘を払って《固定観念》と敬意を抜き放つ。

頭痛が痛い。三百六十三万二千七百七十と五。

ふふ、くくく。

頭痛が痛い。三百六十三万二千七百七十と六。

きゃははははっ。

笑ってんじや……

「笑ってんじやねえよっ！ 黙れ黙れ、黙れっ」

笑うな。オレを見下すな。「与えられた」者の優越を、見せびらかすんじやねえ。

殺してやる。今すぐにでも。オレは《ステレオタイプ固定観念》を振り上げる。

百二十と九番目が、オレを見上げていた。突如として表情を失って、無よりも空虚な瞳で。柄を握る手が、空中で硬直する。こいつ、空っぽじゃねえか。空っぽのくせに、どうして笑うんだよ。どうしてそんなに、余裕こいてられるんだよ。

泣けよ。喚けよ。それが奪われる者の正しい態度だろ？ ……奪い足りないのか？ こいつはオレに奪われていることが分からねえのか？

「いいこと教えてやるよ。お前の父親を殺したのは、オレなんだぜ」

百二十と九番目は、ばちくりと目をしばたかせる。まるで「ウニとヒトデは同じ種類の生き物なんだぜ」と聞いた子供のよう。鋭い殺意や鋭い刃物の下にはまるで不釣り合いな表情だ。

「おねえちゃんがパパを天国へ連れて行ってしまったの？」

「…ああ、そうだ」

どうだ、もう笑えないだろう。殺したいほどオレが憎らしいだろう。怒れ。叫べ。牙を剥け。奪われて、オレと同じになって、オレを肯定しろ。nプラス一番目の奪われた者として、オレの存在を帰納的に証明しろ。

さあ、百二十と九番目。お前はオレをどう呪う？ 理不尽な篡奪者をどう憎む。

…言ってみるよ。

「だったらおねえちゃんはきっと、天使なんだね」

そして百二十と九番目は、笑んだ。ロケットの中の写真よりも、最初に出会った時の笑みよりも、オレが今までに見た誰のどんな笑顔よりも柔らかく、百二十と九番目は笑った。

頭痛が痛い。三百六十三万二千七百七十と七。

なんで…、その笑みは「空っぽ」じゃねえんだよ……。

ステレオタイプ

指先が緩んで、《固定観念》が滑り落ちる。不自然な角度で石畳に刀身を打ちつけた古刀は撓み、澄んだ金属音を伴って破断した。

頭痛が痛い。三百六十三万二千七百七十と八。

三百六十三万二千七百七十と八回目にして、オレは生まれて初めて、敗北した。

頭痛が痛い。三百六十三万二千七百七十と九。

痛みが意識を、思考を、視界を、全て覆い尽くしている。

頭痛が痛い。三百六十三万二千七百七十。

目が覚めるまで、自分が眠っていたことにも気がつかなかった。：そういえば、頭痛のカウントも増えていない。こんなことは未だかつてなかった。薄暗いこの部屋は何だ。今は何時だ？

「目が覚めましたかい」声のした方を見ると、見知らぬ小男が立っていた。「このまま死んじまうのかと思いましたが」

「：誰だ」

「ホスゲンだよー。おねえちゃんをここまで運んで来てくれたんだよー」

オレの顔を上から覗き込んだのは、百二十と九番目だった。

「うわっ！」

慌てて上体を起こすと、オレの額と百二十と九番目の額が正面衝突する。百二十と九番目は後ろにひっくり返り、オレは再びベッドの上に撃墜される。

「うゝ。痛い」と言っただけし、百二十と九番目は笑う。

頭痛が痛い。三百六十三万二千八百八十と一回目は外側が痛い。これをカウントすべきかどうかは正直微妙なところだが。まあいい。独断と偏見法第四百五十八条「迷ったらとりあえず数えとけ」だ。

「：ここは何処だ」

「おいらたちの隠れ家だよ。このシェリが、『おねえちゃんを助けてほしい』って言うから、ここに連れて来ただ。：ずいぶん苦労したんですけど。あんたの見かけのわりに随分重いから」

この小男、そんなにオレに殺されたいのか？独断と偏見法第四十と三条「オレの体重の話題は、これを禁じる」。百三十番目はこいつにしてやろうか。

「名前を訊いたら知らねえっていうから、まさかホンモノの姉貴じゃあるまいが、あんた一体誰ですかい」

「：一体何のつもりだ？オレは助けてくれなんて言った覚えはない」

「おい、あんた、いくら何でもその言い草は……」

「キゼツしてたら『助けて』なんていえないもんねー」百二十と九番目が、激昂しかけた小男を遮るように言った。「だからボクが勝手に頼んだの」

「オレはお前を殺そうとしたんだぞ」まさか忘れたとは言わせない。

「でもボク生きてるよー？」生きてたから、助けたよ、と百二十と九番目は笑う。

「おいおいシェリ、こいつお前さんを殺そうとしたのかい！そんな人を助けようなんて物好きにもほどがある」

「誰かさんもそうじゃなかったけー？どの口がそんなこと言うのかな、んー？」

「そ、それは言いつこなし、ってやつだ。おいらはお前

さんを心配してんだよ」

百二十と九番目は、ふふ、分かっているよ、と笑う。

「なあ、あんた」小男がこちらに向き直り、固く握った拳をこちらに向けた。「この子に何かしようってんならただじゃおかないぜ。この盗賊ホスゲン、腕っ節にはいくらか自信があるんだ」

ただじゃおかない、か。

「お前、オレを誰だと思って言った？」オレは小男を睨み返す。

「いや、それが分かんないからさっき訊いたんでしようが」自分で無視したくせに、と小男は毒気を抜かれたあきれ顔をする。認めたくない。認めたくないが今回に限ってはオレがマヌケだった。百二十と九番目がきゃはは、と笑う。

「笑うなっ！」

「え、じゃあどんな顔してればいいの？」と百二十と九番目は尋ねる。

「泣いたり、怒ったりしてみろよ」

「それ、できない」あげちゃったから、と百二十と九番目は言った。

「はあ、あげた、だあ？意味分かんねえこと言うなよ」

「それは……」小男が何かを言いかけた時だった。安っぽい作りの扉がヒステリーを起こしたような音を立てて開き、奇妙な人間が入って来た。……というか、こいつはそもそも人間なのか？ひょろりと痩せてのっぽな体に、通

常人間の頭にあたる部分にはブリキのバケツのようなものが乗っている。きつと何かを被っているだけで、下には人間の顔があるに違いない。そんなオレの淡い期待を、百二十と九番目は見事に打ち砕いた。

「イベリットおかえりっ！」そう叫んで百二十と九番目はバケツの男に抱きつく、というよりむしろ体当たりをかます。瘦身のバケツ男は子供の突進にもぐらりとパランスを失い、閉めたばかりのドアに後頭部を強打した。がるん。

内部に空洞を持つ金属特有の音がして、バケツ的な物が転げ落ちる。しかしその下に当然残るべき人間の「頭部」が、無かった。バケツが落ちた後には、平坦な肩だけが残された。

頭痛が痛い。三百六十三万二千百八十と二。

「ごはんなにー？ボク、とんでもない料理たべたいな」目の前で起きているとんでもない事態を余所に、百二十と九番目は首の無い男と夕飯の相談をしている。

「アイ・キャン・フライ。イベリットは揚げ物をつくれるロボ。とんでもないけどフライ料理ロボ」

そう言う声は、本体からではなく、床に転げたバケツから聴こえてくる。

「な、何なんだよこいつは」

「イベリットはロボだよ」ねー、と百二十と九番目は笑う。

「イペリットはロボだロボ」首の無い男も言う。いや、言ったのは首の方か。

：と、というか「ロボ」って、何だよ。

「『ロボ』がなんだかは知らねえが、すくなくとも『ロボ』は語尾に『ロボ』をつけて喋ったりしねえと思っせ」

「ういーん、がしゃん。ういーん」

「ほら、『ういーんがしゃん』って言ってるし」

「明らかに口で言ってるだろうがっ」キレルオレを、百二十と九番目はきゃはは、と笑った。駄目だ。ここに居ると調子が狂う。どうしていいか、分からなくなる。

「帰る」オレは言い放って立ち上がった。こんな気分ですゴトができるか。

「えい、せっかくだからごはんたべてきなよー。イペリットのごはんおいしーんだよ」

「いるかよ」追いつがる百二十と九番目の手を乱暴に払い、玄関に向かってつかつかと歩を進める。よろけた百二十と九番目を支えて、小男がオレに非難の眼差しを向ける。

「当店自慢フィッシュ&チップスを食べずに帰るとはお客さんもぐりロボ」

頭を拾い上げたバケツ男が言った。

「いらねえ、つってんだろうが」渾身の叫びはしかし、錆びた蝶番の絶叫に殆どかき消された。

「うーん、おねえちゃんはフライがキレイなんだねー。じゃあ仕方ないか。でもでも、また来てよねー」

満面の笑みで手を振る百二十と九番目に向かって、オレはカ一杯扉を閉めた。しかしそれでも、扉は軋りながらゆっくりと閉まる。

「言われなくても来てやるさ。次こそはお前を殺しにな」

そしてオレは、翌日も、その翌日も似非フリート街の「隠れ家」を訪れた。

つまり翌日も、その翌日も、オレは百二十と九番目を殺し損ねたのだ。

二度目の「襲撃」でオレは奴らの名前を覚え、五度目の「襲撃」で奴らはオレの名前を知った。十度目の「襲撃」にオレは武器を携えず、二十と三度目の「襲撃」でオレは遂にバケツ男のフィッシュ&チップスを喰った。そして百二十と八番目を殺してから、ひと月が過ぎた。

普段なら時を経るごとに間隔を狭めるはずの痛みの波が、その一ヶ月は不思議と安定していた。理由は分からない。ただ、最初は「調子が狂う」と感じていた「隠れ家」^{テンション}の空気が、次第に心地よくなっていったのは、事実だ。百二十と九番目に対する殺意が消えたわけじゃない。毎回、毎回、オレは確かに奴を殺そうと思っただけじゃなく、家の軋る扉を押すのだ。その意味でやはりそれは「訪問」ではなくあくまで「襲撃」だった。「襲撃」が名ばかりのものになっても、シエリを百二十と九番目と呼び続けることだけが殺意の証となっていた。

百二十と九番目は、オレを助けたことをきっかけに「隠れ家」で暮らすことになった。隠れ家で目を覚ましたとき、奴らは既にすっかり打ち解けた様子だったから、てっきり顔なじみなのかと思ったのだが。小男：ホスゲンとは二度目、バケツ男：イペリットに至っては初めて会ったのだという。オレを助けてくれる誰かを探そうちに、たまたま見かけた顔見知りかホスゲンとか。ホスゲンの方でも百二十と九番目を探していたらしいから、あながち偶然でもないのかもしれないが。百二十と九番目の父親が殺されたことを新聞を通じて知って、自分が引き取ろうと決めたらしい。オレと同じ道筋を通して施設にたどり着き、「誘拐」の事実を知ったのだ。そしてやはり人買いを疑い、しかし締め上げるだけの力は無かった。で、仕方なく腕っ節の代わりに足を使っていると、カモがオレを背負って飛び出して来た、ってわけだ。

ホスゲンとイペリットは似非フリート街の路地裏を根城にするこそ泥だ。頭の足りない金持ち連中を相手に、カツアゲまがいのセコい盗みをして金を稼いでいる。「そんなおいらたちに、シェリと暮らす資格なんかありやあしないのかもしれないね」とホスゲンは言う。奴らの暮らしが貧しいのは明らかだ。正直、こそ泥ふたり組が暮らして行くだけでもぎりぎりのはずだ。

「だってのに、なんであいつを養うことにしたんだ？」
そう問いかけたのは、二十と七度目の「襲撃」のときだった。百二十と九番目とイペリットは揃って出かけ、

隠れ家にはオレとホスゲンがふたりきりで留守番をしていた。
「あの子は、おいらの命を救ってくれたんでさあ」
「ふーん」

「ふーん、って、それだけですかい」
「だってオレは別にお前の身の上話なんかに興味ねえし」
それにあらかた予想はつく。こいつも大体オレと同じなのだろう。百二十と九番目に喧嘩を売って、逆に助けられた。

「ちょっと気になっただけさ。オレはこいつに初めて会ったとき、心底気持ち悪いと思った。お前もそうじゃなかったのか、ってな」
「気持ち悪いだなんて、そんな。今でもそう思ってるんですかい」

「正直、分からなくなっちゃった。あいつを見る度に感じるのもややもやした感覚が、嫌悪なのかどうか、な」
「おいらは多分、その答えを知ってますぜ」とホスゲンは言うが、そこでふいに口ごもった。言ってみろよ、とオレは目で続きを促す。

「それは確かに嫌悪ですが、嫌悪は嫌悪でも自己嫌悪でさあ。あの子を見ると、自分の心がどうにも醜く思えてしょうがない」

「心が歪なのは、あいつの方じゃねえのか。あいつ、オレに言ったんだぜ？父親が殺されて、悲しくない、ってな」

殺したオレが言うのもなんだが、百二十と八番目は息子を心から愛しているようだった。心臓を目の前にして奴が咬いたのは息子の名前だったのだから、間違いない。それなのに、百二十と九番目は涙を流すどころか、悲しみさえしなかったのだ。

「そもそもシェリには、『悲しみ』が無いんでさあ」

「『悲しみ』が、無い？」何言ってるんだ、こいつは。悲しみが薄いオレのような人間は、確かに存在する。だがある感情が根本的に欠落した人間など、いるものか。

「もっと言うなら、『怒り』も『憎しみ』も、『悪意』に属するような感情の全ても、あの子は全く持っていないんでさあ。あの子は笑う以外に、感情を表すことができないんです。明るく、清らかな心を持つことしかできないんです」

オレが百二十と九番目に嘆きを、怒りを、憎しみを、悪意の反射を求める度に、あいつの笑顔の下には確かに「空っぽ」が見えたことを思い出す。理屈で納得はできない。だがオレは見たのだ。がらんどうの感情を。

「：生まれつきか？」オレの頭痛のように。

「だったらまだ救いがあったんでしょがねえ。あの子は自分の感情を、他人にくれちまっただけです」

そういえばあいつは言っていたな。「怒れ、嘆け」と要求したオレに、「あげちゃったから、できない」と。だが、「感情を他人にやる、ってどういうことだよ」

「：能力ですよ。あの子の能力は、『分け与える』能力なんです。あの子は自分の存在そのものをちぎって、バラバラにして、それを求める人間にくれてやるんです」

百二十と九番目が初めて『与えた』のは五つするとき。能力が目覚める年齢としてはやや早い方だ。相手は四つ年上の少年だった。彼は脳に障害を抱え、感情をうまく表すことができなかった。誰もが血のように紅い瞳を持ち、感情の欠落したその少年を不気味がり、遠ざけた。隣家に住む百二十と九番目だけが遊び相手だった。ある夜、彼の父親が心臓を取り出されて殺された。それは奇しくもその後二年間あまりに渡って繰り返される百二十と八の殺人の筆頭を飾る殺人だったのだが、当時の警察が生まれたばかりの連続殺人鬼《ヘッドエイク》にたどり着くことはなかった。少年は百二十と九番目に言ったという。父親の死を悲しみたいのに、殺したやつを憎みたいのに、自分にはそれができない。誰も失っていないはずのおまえが、ぼくのこと悲しんだり、憤ったりしているのにおまえだけができるなんてそんなのずるい、と。だから百二十と九番目は自分の感情を彼に譲ったのだ。自分にはそれができるような気がしたから。そして少年の感情は満たされた。父さんを殺したやつを探して、復讐してやる。悪意を手に入れた少年は、小さな果物ナイフを手にも非倫敦の裏通りへと駆けこみ、《ヘッドエイク》の姿を見ることもなく闇へと消えた。

百二十と九番目が、『分け与えた』感情を失っている

気づいたのは、隣家の少年が失踪したという知らせを聞いた時だった。少年の母親は他人の目を憚ることもなく涙を流しながら「息子までもいなくなってしまった」と嘆いた。百二十と九番目はしかし、兄のように暮っていた友人の失踪を微塵も「悲しい」と感じなかったのだ。心の空虚に反響する「何ものでもない」感情の波を排泄するために、百二十と九番目は笑った。「あんたのせいで、あんたのせいでルイはいなくなったのよ」と号泣する母親の前にして、笑うしかなかったのだ。隣家の母親は、百二十と九番目が失ってしまった憎しみと怒りをこめて彼を睨み、そして二度と彼の家を訪れなかった。百二十と八番目は、それすらも悲しまなかった。悲しめなかった。

「そんな話を、あの子は笑いながらするんですよ。そういう時のあの子の笑顔は、笑っているのに、無性に悲しくなるんですよ。笑うことしかできなくても、悲しむことができなくても、あの子は確かに悲しんでいるんですよ。もしかしたら心じゃない、どこかで」長い話を途切れさせて、ホスゲンは冷めたコーヒートを啜った。

「笑いは、笑いだろう。単なる顔面の筋肉の引きつりだけかねえよ。その意味はいつだってひとつだ」

「そんなこと、ありませんよ」ホスゲンは諭すように言う。「姉御だってほんとは、分かっているはずでさあ」

オレは、答えない。答えられない。代わりに、オレは尋ねる。

「もしかして、左耳もそうなのか？」

ホスゲンは頷いた。

「道ばたで物を乞いをしていた耳の聴こえない爺さんに、くれてやったそうです。おいらが一緒なら、そんなことあさせなかったのに。その爺さんだって、しばらく前に殺されちゃった。それじゃあ一体あの子は何のために聴覚を半分失ったんだか。あの子はまだ、爺さんの死を知りませんがねい」

頭痛が痛い。三百六十五万四千二百二十と八。

シゴトをするということは、殺された本人だけじゃない、犠牲者の周りの人間からも多くのものを奪うということだ。そんなことは、百も承知だ。だからこそオレは綻びた世界への復讐としてこの手段を選んだ。だが百二十と九番目はあまりにもオレに奪われ過ぎてはいないだろうか。オレの存在が百二十と九番目を空っぽにし、自分をバラバラに千切ってまで残した僅かな足跡までも消し去っていく。まるでオレ自身の頭蓋に巢食う（ヘッドエイク）頭痛のように、百二十と九番目の運命には常にオレがつかまとい、全てを奪ってきたのだ。百二十と九番目は、あいつの存在は、まるでオレから奪われるために生まれてきたみたいだ。

「：オレだよ」

ホスゲンはオレのコトバが聴こえないかのように再びカップに口をつける。

「オレが殺したんだ。あいつの友達の親も、耳を貫った爺さんも」

「ご冗談を。子供一人手にかける度胸もない姉御が、あの連続殺人鬼のはずがありませんぜ」

オレが初めて名乗った時にも、ホスゲンはそう言った。

「分かってんだろ。冗談なんかじゃないって」独断と偏見法第八百とんで二条「笑えない冗談を言うな。笑える冗談も、言うな」だ。

「おいらは所詮悪党ですからね。姉御が来ないとあの子が寂しがる。姉御がいたからあの子がここに居る。それだけが大事なんでさあ。姉御が人殺しかどうかなんて、正直どうでもいいんですよ。姉御がシェリを殺せないことは、もうよく分かりましたから」そう言ってホスゲンは空になったコーヒーカップを両手でさする。

「おいらは独りよがりで、自分勝手な悪党なんで。かくいうおいらも、あの子に『与えられた』人間のひとりなんですよ。酒を飲み過ぎて肝を壊したんです。死にかけて、それでも飲んだくれていたら、あの子が自分の肝を半分くれたんでさあ。おいらはあの子を誘拐して、身代金で飲もうなんて考えてたつてのに……そりゃあ、肝臓つてのは半分失ってもいつか元に戻るもんです。だけでもそれが、奪われて生きてきたあの子から、おいらが更に何かを奪っていい理由になりゃあしません。だからおいらは決めたんです。あの子がくれた物よりもっと沢山を、あの子に返そうと。こんなしがないこそ泥じゃ、そ

の願いはいつまでも叶わないかもしれませんがね」

ホスゲンは自嘲気味に笑う。何故だろう。笑顔を見る度に背筋を這い上がっていた悪寒は、いつの間にか消えていた。いちいち笑顔を憎み、嫌悪するには、この隠れ家はあまりにも笑いに満ち過ぎていた。

「なあ、ホスゲン、オレ……」

扉が、絶叫した。

「ただいまーっ！疲れた、おなかすいたっ！」

金属の軋りに負けじと、百二十と九番目は大声を張り上げる。

頭痛が痛い。三百六十五万四千二百二十と九。

言いかけたコトバは、宙に消えた。急に消えた。

「ねえねえ、エイクっ！今日はもちろんご飯食べてくよねー？」

百二十と九番目は期待を込めたキラキラの目でオレを見上げる。こいつの能力は確かに精神操作じゃなかった。だがこれが精神攻撃以外のなんだ？事実殺人鬼のオレは、既に殺されかかっている。痛みもなく、むしろ心地良く染み込んでいく甘い抗悪意剤。

「なあ、百二十と九番目、お前はオレのこと愛してる？」

オレは意味も無くおきまりの殺し文句を呟いた。「オレはお前からこれ以上ないくらい沢山奪ってきた。その上命まで盗ろうとしたんだ。そんなオレを、お前は愛してるなんて言えるのか？」

「うん。あいしてるよー、ボク、エイク大好きだもん」
即答だった。百二十と九番目は、百二十と八人の誰よりも早く応えた。

「それは心ハートからのコトバかよ。オレがお前の父親を殺したと、忘れたわけじゃないよな」

「覚えてるよー。エイクにボクの心臓ハートをあげるのも、ちゃんど、覚えてるよ」

「そうだ。オレは確かにそう言った。お前の心臓を頂きに来た、と。だがこいつの能力を知った後では、そのコトバの意味が異なってくる。」

「なあ、それ、取り消してもいいか」

「そうだ。ホスゲンの言う通りだ。オレはもう絶対にこいつを殺せない。男に二言はない、なんて言うけれど、まあ、オレには関係無いし。」

「ん？いいよー」百二十と九番目はこれにも即答する。

「なんとなくね、いつかエイクがそう言うんじゃないかと思って、いままで、あげなかったんだよ。だって、エイクに足りないの、心臓じゃないもんねー」生きてて、あったかいもんね、と百二十と九番目は笑う。オレの手を握る。

体温ってのは不思議だ。本当はどちらかがより温かく、どちらかが冷たいはずなのに、触れるとどちらも温かい。この手のひらに指先に奥深くしみ込んだ血が、小さく真白な手を穢してしまいはしないかと恐れながら、握り返す。

す。

「でもね、ボク、エイクに足りないのがホントは何なのか、分かんないよ。ホントに大切なものが何だったか分かんなくなっちゃうくらい、傷ついて、ぼろぼろなんだもん。ねえ、エイク。エイクは何を失くしたちゃったから、そんなに辛いのか？」

オレは答えられなかった。

そんなの、答えられるわけがないだろ。

頭痛が痛い。三百六十五万四千四百三十。

「そうだよねー。エイクにも、分かんないよね。分かんないとおげられないよねー。ボクが一番助けあげたいのはエイクなのに」そう言って百二十と九番目は繋いだままの手をぶらぶらと揺する。「初めてエイクに会って、エイクの身に触れたとき、感じたんだ。ボクは、ボクの存在は、まるでエイクの欠けちゃったところを補うために生まれてきたみたいだ、って」そういうのをヒトメボレっていうのかなー、と百二十と九番目は笑う。

「だからさ、ボク決めたんだ」

耳を塞ぎたい。百二十と九番目が何を言おうとしているのか、なんとなく分かるから。両手で耳を塞げば聞かなくてすむ。ヘッドエイク今までのオレは壊れずにすむ。それなのに。

言わないでくれ。そのコトバが声にならない。優しく握られた手を、振りほどいて耳を塞ぐことができない。

「エイクに、まだ残ってるボクを全部あげるよ。ちょっ

と欠けちゃってるけど、ボクの残り全部の中に、エイクに足りないもの、きつとあると思うから。あったらいいな、って、思うから」

そう言って、百二十と九番目は笑った。

「そんなの……、割に合わねえよ」

オレはお前から何もかも奪ってきたのに。オレがお前に与えられるものなんて、何もないのに。オレの中に詰まっているものといったら悪意と殺意と痛みばかりで、お前がくれると言うものの対価なんて、絶対になりえないのに。そんなの不平等だ。不公平だ。

頭痛が痛い。三百六十五万四千百三十一。

「お前はそれでいいのか？お前はそれで何が得られるんだよ。納得できねえ」

「よかったー」百二十と九番目は喜色を満面に浮かべて言った。『いらぬ』って、言わないんだね。エイクにボクなんかいらぬ、って言われちゃったら、どうしようかと思っちゃった」

シエリは笑った。本当に嬉しそうに笑った。だけどそんな人間違ってる。絶対に間違ってるよ。自分自身を他人に奪われて、それが嬉しいなんて。

「でもボクがあげるだけじゃエイクは納得できないんだよねー？」んー、どうしよう、と百二十と九番目は首をひねる。そしてやがて、顔を輝かせるとパン、と手を打った。

「じゃあさじゃあさ、ボクをあげるかわりに、エイクも

ボクのことちゃんと名前で呼んで？ただの数字じゃない、ボクの名前で。そうしてくれたら、嬉しいな」

そんな、簡単なこと。だがその簡単なことを、オレはいままでしてこなかった。自分の悪意を裏切ることが怖かったから。だが今は、こいつを裏切ることが怖い。

オレと同じで、オレと正反対なこいつを裏切るのが怖いと、そう思える。悪意によって重ねられた百二十と八の

存在証明は、たつたひとつの例外によって覆されようとしていた。傷だらけの頭蓋の中で、『ヘッドエイク』が苦しんでいた。この綻びた世界に生まれてからずっと、オレ

を苦しめてきたトゲトゲのバケモノは、苦しんで、今にも息絶えようとしていた。だけどよウニ、てめえにはまだ死んでもらうわけにはいかねえ。

「分かったよ、シエリ。でも、ちょっとだけ待ってくれ。

オレが世界から受け取った悪意を、この綻びた世界に全部余さず返済するまで、それまでオレは、『ヘッドエイク』頭痛でいなきゃならねえんだ」

オレ程度の小さな器じゃ、悪意も、シエリも、どちらも受け止めることなんてできはしない。本当にシエリを受け入れるために、オレはこの悪意を全部吐き出しちまわなきゃならねえんだ。

「いいよー。ボク、待ってるから。エイクが頭痛がなくなるの、ずっと待ってるよ」シエリはふふ、と嬉しそうに笑う。

「ホスゲン、イペリット。ごめん」お前らが誰よりもシエリのことを思ってるはずなのに、シエリがこれ以上奪われないように守ってきたのに、オレはそれを知ってるはずなのに。こいつにこんな約束させて、ごめん」

「謝ることなんてありませんぜ。姉御がそれにおいらは思うんですよ、エイクの姉御ほど、あの子が必要なお人はいないとね」

「そうだ。認めるよ。オレにはシエリが必要だ。だけど独断と偏見法第二十條【釣り合わない取引はこれを禁じる】。オレは必ず見つけるからな。シエリと、お前らがオレに与えてくれたものへの対価を」

「期待せずに待ってますよ」

「ムリしなくても、出せ払いでいいロボ」

「姉御がゆっくりしてくればそれだけ、シエリはおいら達と居てくれますからねい」ホスゲンは唇を歪めてにしし、と笑った。この隠れ家で笑いはシエリの役目だ。だが、こいつの笑顔も捨てたもんじゃない。

「それで、エイクはどうするのー？」

「どうするの、って…」

「ごはん」まるで今までのやり取りなど存在しなかったかのように、シエリは言った。「ボクおなかずいちゃったよ」

その間の抜けた声の調子に、張りつめていた気が思わず緩む。

「…イペリット、今日のメニューは？」声が掠んでいる。

「揚げ物ロボ」

「またかよ」

「フライはフライでも、今日はぶっ飛んだフライロボ」

「で、それって結局なんなんだよ」

「フィッシュ&チップス、ロボ」

「いつも通りじゃねえか」

「はこん。」

そしてイペリットの頭が床を転がり、シエリが笑った。

「…悪い、オレやっぱり帰るわ」

「えー、なんで？」

「お前らに泣き顔なんて見られたら、一生の恥だからな」ふ、と唇の間から吐息が漏れる。

三人のきよとん、とした顔を残して、錆びた扉が閉まっていた。

扉が完全に閉じると、すっかり日の暮れた路地にひとり取り残されて、自分が笑っていたことに気がついた。偽物じゃない笑顔なんて、いつ以来だろう。くすぐった

さの残る口角に、そっと触れてみた。頭痛が痛い。三百六十五万四千四百三十と二。目頭が熱

くて、鼻の奥がつーんとする。これも、カウントしていいんだろうか。まあいい。独断と偏見法第四百五十八條【迷ったらとりあえず数えとけ】。

アイデンティティ

自己同一性をぐちゃぐちゃにされたショックから立ち

直つて、見た目上元通りの悪意と痛みの申し子に
戻れるまで、二日かかった。それでも思ったよりだ
いぶ短い。本当ならもっと長引いたのかもしれないが、う
じうじしていられない事情があつたのだ。似非倫敦市警に、し
っぽを掴まれた。しっぽなんてついてた覚えがないんだが、
暫く静かだと思つていたら、前に一度ポコポコにされた
反省を踏まえてしっかり準備を整えていたらしい。厄介
な事情はそれだけじゃない。ひとつ。潜伏には都合な
似非フリート街の路地裏を使えない。……あいつらのと
ころに金魚のフンみたいに警官隊を引き連れて行つたら、
オレはクソ野郎だ。ふたつ。警官連中を殺せない。独断
と偏見法第二百と二条【番号付けされた犠牲者以外の
殺人はこれを禁じる】。百二十と九番目がまだ生きてい
る以上、警官連中をうっかり殺すことは許されない。悪魔
の篡奪は、あくまでオレの自由意志の元に行われなけれ
ばならないのだから。だがシエリを殺さないと決めた瞬
間から、図らずともこの二百と二条は殺人鬼からの引
退宣言になつちまつたのかもしれない。

を叩き潰すにはオレの方から攻撃に出なきゃならない、
つてことだ。そのデメリットは、基本的に各個撃破しか
できない、というところにある。まとめて攻め込んで来
て、まとめて潰れてくれる方がありがたいんだが。だが
現実オレはありがたがるどころかアリがたかつてる。ム
シしてくれと言つたところで聞いてくれる相手じゃない。
聞いてもらへる立場じゃない。結局完全に奴らを振り切
るまで、追っ手を折つて、また追っ手折つて折りまくつ
て、一週間が過ぎた。やつと自由の身になつて迷わず向
かつたのは、似非フリート街の隠れ家だつた。オレは二
日間じっくり考えた。そして図らずとももう一週間、再
考の余地を与えられた。いくら頭蓋のウニが邪魔をしよ
うとも、それだけの時間があれば考えをまとめられる。
オレにはあいつらに言わなきゃいけないことがあつた。
「よう、ご無沙汰したな！」金属音と大声の挨拶は、も
はやお約束だ。「元気にしてたかよ」
声が、空間に吸い込まれていく。あまりの静けさに、
オレは留守を疑つた。鍵をかけないなんて、犯罪者が勝
手に入り込んだりしたらどうするつもりだ？不用心にも
ほどがあるぜ。

まあいい勝手に上がらせてもらうか、と玄関を潜ると、
汚れたテーブルを挟んでホスゲンとイペリットが座つて
いた。どちらも沈鬱な表情で、俯いている。
「なんだよ、いるじゃねえか。どうした？またへんも
ん喰つて腹でも下したのかよ」

ふたりは答えない。何だよ。

「あ、エイクだ。おひささー」シェリが奥の部屋から顔を出した。その顔を見て、頭の中が真っ白になる。

頭痛が痛い。三百六十五万七千八百九十と七。

オレはシェリに駆け寄ると、右目の上に巻かれた包帯を塗り取った。きゃー、とどぼけた悲鳴をあげて逃れようとするシェリの顔を、ぐいとこちらに向かせる。悪い予感も当たった。シェリの翡翠色の右目が、失われていた。

「おい、お前ら」シェリの手には包帯を押し返すと、汚れたテーブルに向き直る。「こりゃあ、どういうことだよ」ふたりは答えない。

「どういうことだ、って訊いてんだよ！」オレはふたりの視線を一身に集めているテーブルを拳で殴りつけた。

「答えろ！」

ポロい隠れ家全体が揺れ、天井からばらばらと埃が降る。

「すみません、姉御……。おいら達がついていながら……」

「イベリットは役立たずロポ。こんなボンコツ、スクラップがお似合いロポ」

「てめえらの懺悔を訊いてんじやねえよ。なんでシェリの目が盗られてるんだよ？いつ、誰に！」

「盗られたんじゃないよー、あげたの」だから怒らないで、とシェリが言う。

「シェリ、お前の目を持って行ったのはどこのどいつだ。

言えよ」

「知らない男の子だよー」シェリは笑った。だがその笑みに、違和感を感じる。これは、こいつの笑顔じゃない。何の感情も込められていない……。偽物だ。こんな笑い方をする奴をよく知っている。この子の父親を殺した殺人鬼だ。

「お前、嘔吐してるだろ」

「ウソじゃないよー。ホントだよ」

やめる、目をそらさないでくれ。悪意の無い奴の嘘なんて、下手すぎて見てられない。

「姉御……。おいらたち、この子とずっと一緒に居たんですよ」ホスゲンが言った。「決してシェリをひとりきせたりしやせんでした。この子がこれ以上、奪われたりしないように。昨日だって三人揃って出かけたんです」

「でも、気がついたらふたりとも地面に伸びてたロポ。目が覚めたら、シェリの右目が無かったロポ。一緒に居ても、守れないんじや意味ないロポ」

三人は食料の買い出しに行き、その帰りに襲われた。路地裏に入ったとたんだったという。待ち伏せしていたのだらう。ホスゲンとイベリットは何が起ったかも分からないままに倒され、目覚めた時にはシェリの右目は消えていた。一瞬だけ垣間見えた下手人の人影は、まだ少年と言ってもいらいの若い男だったという。気を失う前に見えたのは、悪意の籠った血のように紅い左眼。

ふたりの話が本当だとするなら、シェリは狙われたの

だ。その特異な能力を知る何者かに。そして右目を奪われた。そう、奪われたのだ。シエリひとりなら、きつと自分の目を与えてくれと頼まれても拒まないだろう。拒めないだろう。相手が拒まないことを知って為される一方的要求は、略奪と同じだ。隻眼の少年が自分のために目を求めたとすれば、そいつは視力を失ってもいいのにシエリの目を奪ったことになる。

だが、シエリは右目を奪った奴の名を頑なに明かさうとしない。ホスゲンとイペリットも何度も説得したそうだが、シエリはしらを切りつづけている。

「どうしても、教えてくれないのか」

「だって言ったら、エイクその人のこと怒るでしょ、そんなのやだもん。エイクは怒っちゃだめー。ボクはその人も、エイクも、好きなの。だから喧嘩しちゃうだめだよ」

頭痛が痛い。三百六十五万七千八百九十と八。

そうかよ。庇ってるのは右目を盗った奴だけじゃない、ってか。それにシエリがそれほど庇う相手だ、きつと悪い奴じゃないんだろう。と、オレは自分のことを棚に上げて思う。ホスゲンとイペリットを気絶させた手腕は見事で、痣ひとつ残っていない。殴られたとうの本人には自分の首の後ろなんて見えないから、そんなこと知りやしないだろうが。それだけの技があれば、このへっぽこふたり組を殺すのなんて朝飯前のはずだ。それをしなかつた、ってだけでも、殺人鬼オレなどよりよっぽどマシな人

間に違いない。

「ごめんねー」

「なんでお前が謝るんだ？」

「だって残ったボクはエイクのものなのに、勝手にあげちゃって。エイク怒ってるのに、ホントのこと言えなくて」ごめんね、とシエリは繰り返す。

牙を抜かれた敵意が、急速にしぼんでいく。これじゃまるで目を盗った奴よりも、オレの方がシエリを苦しませてるみたいじゃないか。だったらオレの怒りは、全く無意味で、まるで無価値で、見当違いだ。

「言っただろ、お前の存在を受け取ることはまだできない、って。だからお前が納得してるんなら、オレにそれを止める権利はねえよ。それに、そいつはお前にとって大事なやつだったんだろ？」

シエリはうん、と頷いた。

「そうか。じゃあ、もう訊かねえよ。訊いたらきつとオレ、そいつのこと殺したくなっちゃうからな」そんなの、望んでない、ってお前は言いたいんだろ？」

「よかったー」シエリはほっとしたように笑う。

それに、わざわざシエリに辛い思いをさせなくても見れば分かる。こいつと同じ右目を持つてる奴がいたら、そいつをぶん殴ってやればいいだけさ。それでおいこにしてやる。

「お前ら」オレはホスゲンとイペリットに言う。「いつまでも落ち込んでんだよ」

「だって姉御、おいら達じゃこの子を守れないんです。守れないと分かっちゃまったんでさあ。これから先、おいら達はどうしたらいいんですかい。おいらたちは弱い。姉御とは違って。弱いものがこの子を守ろうと思ったらどうすればいいんです?」

「そうとも、お前らは弱い。そして弱い奴には何一つ守れやしねえよ」

厳しく言い放つと、ホスゲン、イベリットは更に肩を落とす。

「だが、オレは強い。お前らと違ってな。知ってるか? 強い奴には奪う権利があるんだよ。独断と偏見法第五条【強者が他者から奪う権利はこれを認める】。オレが今まで振りかざしてきた権利だ」

オレはテーブルの周りをゆっくりと歩きながら言う。シェリが手を後ろに汲んでオレの後ろをついてくる。ホスゲンとイベリットは相変わらず俯いていた。

「オレが守ってやりたいのはやまやまなんだが、生憎オレの独断と偏見法には守るための規定なんざ定められちゃいねえ。オレの、オレによる、オレのための法ときたら、奪うことばかり想定していやがる。だからオレには他人を守ることなんざできない。守り方が分かんねえのさ。残念だったな」

コトバがよどみなく滑り出すのは、それが九日の間頭の中で何度もシミュレートした科白だからだ。オレはここを訪れる前から、こう言ってるやろうと決めていた。

「だからオレはオレにできることをする。オレにしかできないことをする。いいか、よく聞けよ、一度しか言わないからな。シェリだけじゃねえ、お前ら三人揃って、オレに奪われる。お前らの存在、生殺与奪の全てを、オレのもの」

「オレのものが、お前らを奪おうとする奴は全部、オレがぶっ壊してやるからさ」

それは世界で一番強引で傲慢で、暴力的で傍若無人なプロポーズだった。反駁なんてそもそも赦しはしない。独断と偏見によって、欲しいものは問答無用で手に入れる。それが盗賊《首領エイク》のルールだ。

《後編へ続く》